

昭和58年度 一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査その3報告書

たま こし
玉 越 遺 跡

— 1 9 8 4 —

建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
袋井市教育委員会

序 文

一般国道1号袋井バイパスの開通は、袋井市民共通の願いであります。工事は磐田・掛川バイパスに続く東と西で進められています。東に所在する坂尻遺跡は、調査概報でご存知のように佐野（益）郡衙（家）と推定され、多大な成果を得ることができました。西に所在する土橋遺跡は、広い面積だけに弥生時代より近代に至る各種の溝が検出され、出土遺物とともに今後の整理に期待するものがあります。昭和59年度には、両遺跡とも調査報告書を刊行できることになっています。

ここに報告する玉越遺跡は、土橋遺跡の調査中、昭和58年7月磐田市教育委員会によって遺跡の所在が明らかにされたものであります。8月に第1次調査、10、11月に現地調査を行いました。建設省の58年度事業であり、バイパス促進のため、地籍は磐田市玉越であります。袋井市教育委員会が調査主体となったのであります。調査では土壌状遺構や弥生式土器をはじめとする遺物が検出され、太田川左岸の弥生時代遺跡群の一端が明らかにされました。

ところで、こうした埋蔵文化財は一度発掘されれば破壊されたも同然で、ただ残るのは遺構の記録と遺物だけとなります。将来、科学文明が発達し調査方法が変化しても再度の調査ではそれなりの成果を得ることは不可能でありましょう。後世に残すためにもより克明な記録が必要と言えるのではないのでしょうか。

一方、科学文明の発達と共に社会も多面的に変化しております。人々の価値観は経済から教育、文化に、「物」から「心」に転換しようとしています。また、地域文化の重要性も指摘され歴史的観点からの発想が大切とされる時代となってきています。歴史の証としての文化財はかけがえのないものです。教育の面でも生き生きとした教材・資料でありますし、郷土愛の発端ともなりえましょう。

ともあれ、発掘調査を進めるにあたり、無理をお願いをした作業員の皆さん、静岡県教育委員会文化課、建設省浜松工事事務所、磐田市教育委員会をはじめ多くの方々の協力を得ました。末筆になりましたが厚く御礼を申し上げる次第です。

袋井市教育委員会

教育長 鈴木 勲 一

例 言

1. 本書は、昭和58年10月1日から昭和59年3月31日まで実施した一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査その3（玉越遺跡）報告書である。
2. 本調査は、建設省中部地方建設局長を委託者とし、袋井市長を受託者として、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、袋井市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査は、寺田義昭、山本宏司（袋井市教育委員会）を調査担当者とし実施したが、現地調査は主に山本が行った。
4. 資料整理は、山本が中心となって行った。その過程で、永井義博、松井一明（袋井市教育委員会）の協力、助言を得た。
5. 本書は主に山本が編集した。執筆分担は、第1章第1節は寺田義昭が執筆し、他は山本が執筆した。
6. 現地調査及び資料整理参加者は次のとおりである。

大場明、鈴木辰男、山下操、樽井幹雄、村松信司
大場とし子、鈴木品子、曾根百合子
7. 本調査に関する事務は、袋井市教育委員会社会教育課で行った。
8. 本書で使用した遺構記号は次のとおりである。

SK－土壙 SD－溝状遺構 SB－掘立柱建物（柱穴列） SX－その他の遺構
9. 本書の編集に際し次の方々から多くのご教示、ご指導をいただきました。ここに記して謝意を述べたい。

五島康司、吉岡伸夫、山崎克己、中嶋郁夫、前田庄一、鈴木節司

目 次

第1章 序 説

第1節 調査にいたる経過	2
第2節 遺跡の位置と環境	3
第3節 調査方法及び層位	4
第4節 発掘調査の経過	4

第2章 遺 跡

(1) SK1	8
(2) SK2	12
(3) SK3	14
(4) SK4	16
(5) SK5	18
(6) SK6	19
(7) SK7	22
(8) SK8	25
(9) SX1	25
(10) SD1、SD2	28
(11) SB1	28
(12) SB2	29
(13) SB3、SB4	29

第3章 ま と め

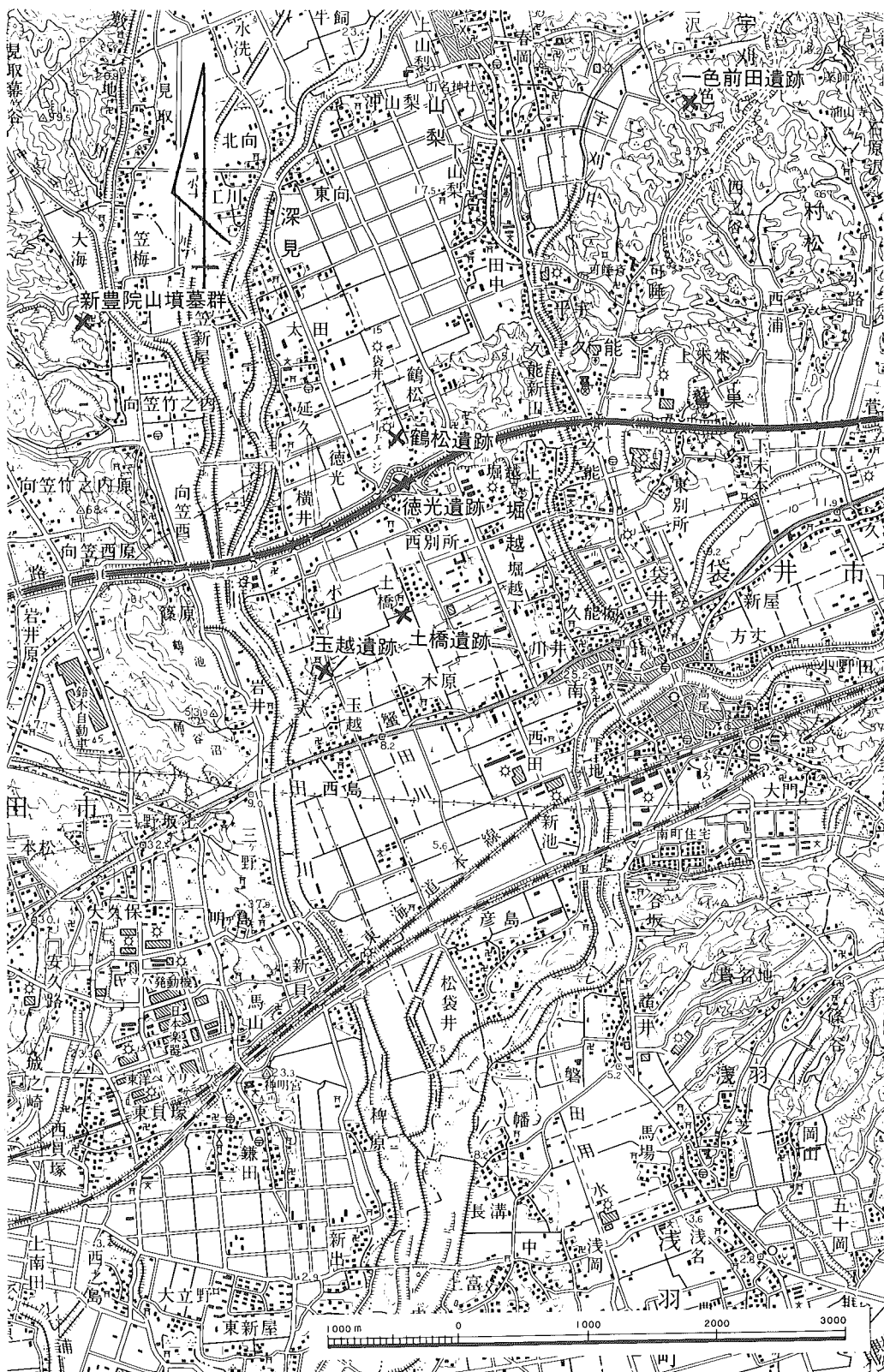
31

挿 図 目 次

第1図	周辺の弥生時代遺跡……………	1	第14図	S K 5 出土遺物(2)……………	19
第2図	基本層位……………	4	第15図	S K 6 実測図……………	20
第3図	調査区全体図……………	6	第16図	S K 6 出土遺物……………	21
第4図	S K 1、S K 2 遺構実測図……………	8	第17図	S K 7 実測図……………	23
第5図	S K 1 出土遺物(1)……………	10	第18図	S K 7 出土遺物……………	23
第6図	S K 1 出土遺物(2)……………	11	第19図	S K 8 実測図……………	24
第7図	S K 2 出土遺物(1)……………	12	第20図	S X 1 実測図……………	26
第8図	S K 2 出土遺物(2)……………	13	第21図	S X 1 出土遺物……………	27
第9図	S K 3 実測図……………	14	第22図	S D 1、S D 2 実測図……………	28
第10図	S K 3 出土遺物……………	15	第23図	S B 1 実測図……………	28
第11図	S K 4 遺構実測図……………	16	第24図	S B 2 実測図……………	29
第12図	S K 5 実測図……………	17	第25図	S B 3、S B 4 実測図……………	30
第13図	S K 5 出土遺物(1)……………	18			

図 版 目 次

図版1	玉越遺跡遠景(磐田原台地より) 調査区全景	図版12	S K 1 出土遺物
図版2	遺構全景 S K 1、S K 2 遺構	図版13	S K 2 出土遺物
図版3	S K 1 遺構 S K 2 遺構	図版14	S K 2 出土遺物
図版4	S K 3 遺構 S K 4 遺構	図版15	S K 3 出土遺物
図版5	S K 5 遺物出土状態 S K 5 遺構	図版16	S K 3 出土遺物 S K 5 出土遺物
図版6	S K 6 遺物出土状態 S K 6 遺構	図版17	S K 5 出土遺物 S K 6 出土遺物
図版7	S K 7 遺物出土状態 S K 7 遺構	図版18	S K 6 出土遺物
図版8	S K 8 遺構 S X 1 遺構	図版19	S K 6 出土遺物
図版9	S B 1 遺構 S B 3、S B 4 遺構	図版20	S K 6 出土遺物 S K 7 出土遺物
図版10	S D 1、S D 2 遺構 S K 1 出土遺物	図版21	S X 1 出土遺物
図版11	S K 1 出土遺物	図版22	S X 1 出土遺物
		図版23	S X 1 出土遺物



第1図 周辺の弥生時代遺跡

第 1 章 序 説

第 1 節 調査にいたる経過

一般国道一号袋井バイパス（袋井地区）の埋蔵文化財調査は、昭和53年度に始まった。建設省、静岡県教育委員会、袋井市の3者で協議がもたれ、路線内に所在する遺跡を調査することになった。それによれば 1. 石ノ形遺跡（坂尻遺跡） 2. 鳥居裏遺跡＝国本遺跡、 3. 土橋遺跡である。坂尻遺跡は、同心橋の架け替え工事に伴い、昭和55年度に第1次調査を、翌年から第2次調査を行い、昭和59年度には名北地区の調査を終わり報告書を刊行する。一方、土橋遺跡については昭和57年度に第1次調査を行い、範囲を確定した。土橋遺跡（土橋地区）の面積は、約12500㎡である。57年度後半には約3500㎡について終わり、58年度には約9000㎡について調査を終了する。59年度には土橋遺跡（堀越地区）約3000㎡の調査を行い、年度末には、調査報告書を刊行する。

昭和53年度の調査で土橋遺跡の範囲は、東が東名高速道路袋井インターチェンジに通じる道路まで、西が蟹田川まで、遺跡は西に及ばないこととした。袋井バイパス（磐田市分）については、霞堤についての調査のみで遺跡は所在しないこととなっていた。ところが、昭和58年7月、磐田市教育委員会により遺跡の所在が明らかにされた。急きょ、建設省、静岡県教育委員会、磐田市教育委員会、袋井市教育委員会の4者で協議をもち、8月に第1次調査を実施することになった。調査費用については、土橋遺跡（一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査その3業務）の契約を変更して行う。経理、雇用の事務は袋井市教育委員会が行う。調査員、調査補助員、作業員は、磐田市で都合し、現地調査をすることになった。

8月31日4者協議をもち、第1次調査の報告と今後の調査予定について話し合った。第1次調査の結果は次のようである。

市道太田小山線西側をA地点、東側をB地点と仮称した。

<A地点>

A2、B1～B3の各トレンチから、弥生時代土器片、古墳時代須恵器片、中世陶器片を含む層が認められた。また柱穴状ピット溝状遺構が検出された。

<B地点>

A7、8、9トレンチ内に弥生時代土器片、古墳時代土師器、須恵器、奈良時代須恵器、中世陶器を含む層が認められた。排水用素掘溝を精査したが同様の結果を得た。

したがってA地点では江戸時代以降の霞堤より南地域、約1100㎡（磐田市域）とB地点ではバイパスセンターNo.390付近より東側でNo.382付近より西側の地域約3000㎡（磐田市域）が調査対象面積である。

席上建設省は、市道太田小山線の道路ボックス下部構造を本年度発注で行いたいとの話があっ第1次調査の結果からすれば、当然磐田市の調査区域である。ところが磐田市は他遺跡の調査があり、不可能であるとの話が出た。もちろん袋井市としても同様であった。

袋井市内部では、バイパスを促進する立場から、工事を止めるわけにもいかないため、結果的には無理を押して袋井市が引き受けざるを得なかったのである。そこで、袋井市域の1100㎡と磐田市域の1100㎡を交換して調査することで結着し、10、11月で調査を行うこととなったのである。費用については土橋遺跡の契約を変更して行うこととした。

第2節 遺跡の位置と環境

玉越遺跡は、袋井駅より、西北西へ3km、袋井市と磐田市の境を南北に流れる太田川左岸の自然堤防上に位置している。

太田川は、春埜山付近に源を発して南流し、森町・袋井市・磐田市・浅羽町・福田町を通過して、遠州灘にそそぐ河川である。この太田川の川筋には、自然堤防による微高地が形成されている。また、背後には、後背湿地が存在している。玉越遺跡は、この、太田川の自然堤防上に存在している。

太田川流域の遺跡としては、蟹田川をはさんで東側に土橋遺跡が存在している。この土橋遺跡は、弥生時代から、江戸時代までの複合遺跡として、溝状遺構、土壇、掘立柱建物などを検出している。遺物としては、弥生土器、土師器をはじめ、墨書土器も出土している。この他に古墳時代の二股鍬、砦も出土している。

土橋遺跡の北側には、鶴田遺跡、鶴松遺跡、徳光遺跡などの弥生時代中期から、古墳時代初頭の遺跡が存在している。

鶴松遺跡では、中期末から後期初頭の住居跡も発見されており、付近にかけて大集落が存在すると思われる。徳光遺跡からは、住居跡は検出されていないが、弥生時代から古墳時代前期の土器が出土している。また、これらの遺跡は、付近の春岡1号墓（方形周溝墓）とのかかわりも指摘されている。

さらに北側には、稲荷領家遺跡、春岡遺跡、一色前田遺跡などの存在が知られている。

稲荷領家遺跡は、弥生時代後期から、平安時代にわたる遺跡で、墨書土器、刀子、瓦などが採集されている。一色前田遺跡は、丘陵の尾根に立地した弥生時代後期の集落で、住居跡が、4軒検出されている。

一方、太田川右岸の磐田原台地上には、先土器時代以降数多くの遺跡が存在している。この中で、新豊院山墳墓群、竹之内原1号墓、権現山遺跡などでは、弥生時代の方形周溝墓や台状墓などが多数検出されている。また、新豊院山墳墓群では、古墳時代前期の台状墓、前方後円墳も検出されている。下原遺跡、東原遺跡、権現下遺跡、竹之内原遺跡などでは、弥生時代末から古墳時代前期の集落も発見されている。

参考：引用文献

『袋井市史 通史編』1983年 袋井市役所

『掛の上遺跡Ⅱ』1983年 袋井市教育委員会

『新豊院山墳墓群』1982年 磐田市教育委員会

『静岡県遺跡地名表』1979年 静岡県教育委員会

第3節 調査方法及び層位

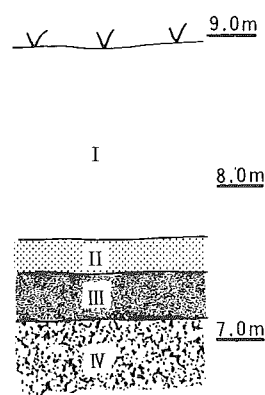
今回の調査区、玉越遺跡A地区は、確認調査（磐田市教育委員会）の結果をもとに、調査区が設定された。

調査にさいし、調査区全域に5m方眼のグリットを設定した。このグリットの南北に走る線を、東から1～16と名付け、東西に走る線を北からA～Hと表わした。グリット名は、そのグリットの北東コーナーのポイント名をあてて、グリット名とした。なおグリットは、国道1号袋井バイパスのセンターポイント、No.398を基準にして設定している。

現地での図面の作成は、20分の1縮尺を基本として、土器の集中地点など必要に応じて10分の1の縮尺で作図した。

写真撮影は、6×7版カメラを中心にして、35mmで補って撮影した。

遺跡の層位は、1.5m～1.6mで基盤層であるIV層が確認され包含層は確認できなかった。基本土層は第2図のごとく、I層盛土（バイパス建設のための盛土）、II層灰色粘土層（水田耕作時の床土と思われる。）III層青灰色粘土層（黄色粒子を含む。調査区内の西側へ行くにしたがって薄くなる。）IV層青灰色砂質土層（III層に砂が多量に混じった層である。）遺構は、III層上面で確認されており、III層及びIV層中まで掘り込まれている。

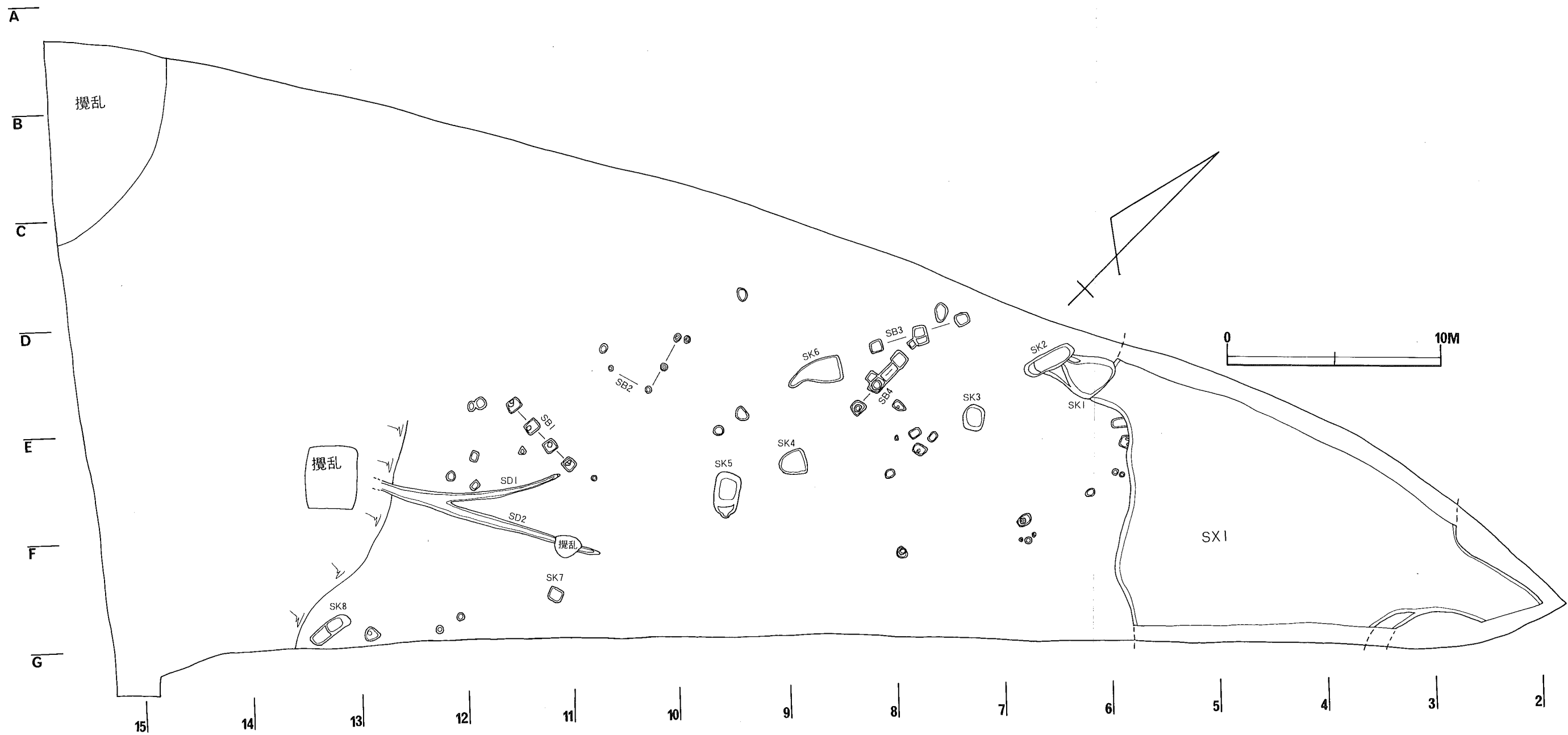


第2図 基本層位

第4節 発掘調査の経過

- ・10月1日～11日、発掘器材の搬入及び、重機による表土はぎ作業。表土はぎは、盛土が多いために、かなりの時間を要した。
- ・10月12日、人による発掘調査の開始。調査区東側から、調査を開始する。
- ・10月15日、SK1を検出したので、範囲の確認を始める。
- 10月17日、SK1を掘り始める。湧水が多いため、作業がはかどらない。遺物は須恵器、土師器などが出土する。いずれも破片が散在して出土する。
- ・10月24日、SK1、SK2を検出する。SX1の掘り下げも行っているがほぼ掘り上った。
- ・10月31日、SX1の西側の遺構確認の作業をしながら、ピットを掘り始める。
- ・11月8日、SK3を検出して掘り始める。
- ・11月11日、SK4、SK5を検出、掘り始める。SK4は遺物はほとんど出土しないがSK5からは、まとめて出土した。
- ・11月17日、SD1、SD2及び周辺のピットを検出して掘り始める。
- ・11月18日、SK8を検出して掘り始める。遺物は意外に少量しか出土しなかった。
- ・11月19日、SK7を検出する。遺物として、口縁部は欠損しているが他はほぼ完形の壺が出土した。

- 11月21日、S K 6 を掘り始める。遺物がまとまって出土している。また、調査区西側も遺構の確認を行っているが、深くまで削平されているため遺構は検出されていない。
- 11月29日、全体写真の撮影。
- 11月30日、現場の後片付けを行い、現場での作業を終了する。



第3図 調査区全体図

第2章 遺 跡

今回の調査では、弥生時代～中世までの遺構の存在が予測されていたが、中世の遺構は、検出されなかった。明らかになった遺構には、土壇、掘立柱状遺構、溝状遺構などである。

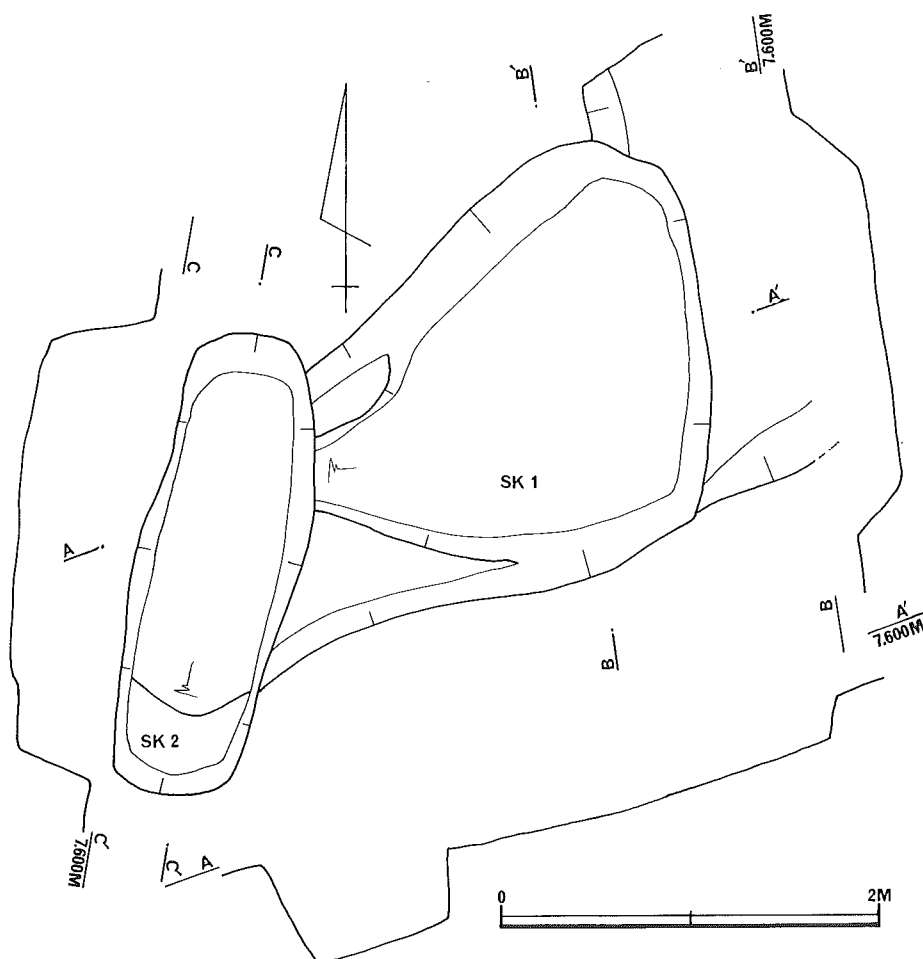
(1) SK 1 (第4図)

SK 1は、調査区の北東、SX 1の西側に位置している。長軸は、現存では2.2m、短軸は2.2m、深さ30cmの不整形を成す。長軸方向は、 $N-70^{\circ}-E$ を示す。

覆土は、1層褐色土（粘性が多少ある。）、2層暗灰色土（粘土質の土であるがしまりはあまりない。）である。

出土遺物 (第5、6図)

1は甕形土器で、口縁部から胴部にかけて約4分の1が残存している。器面は内外面ともに



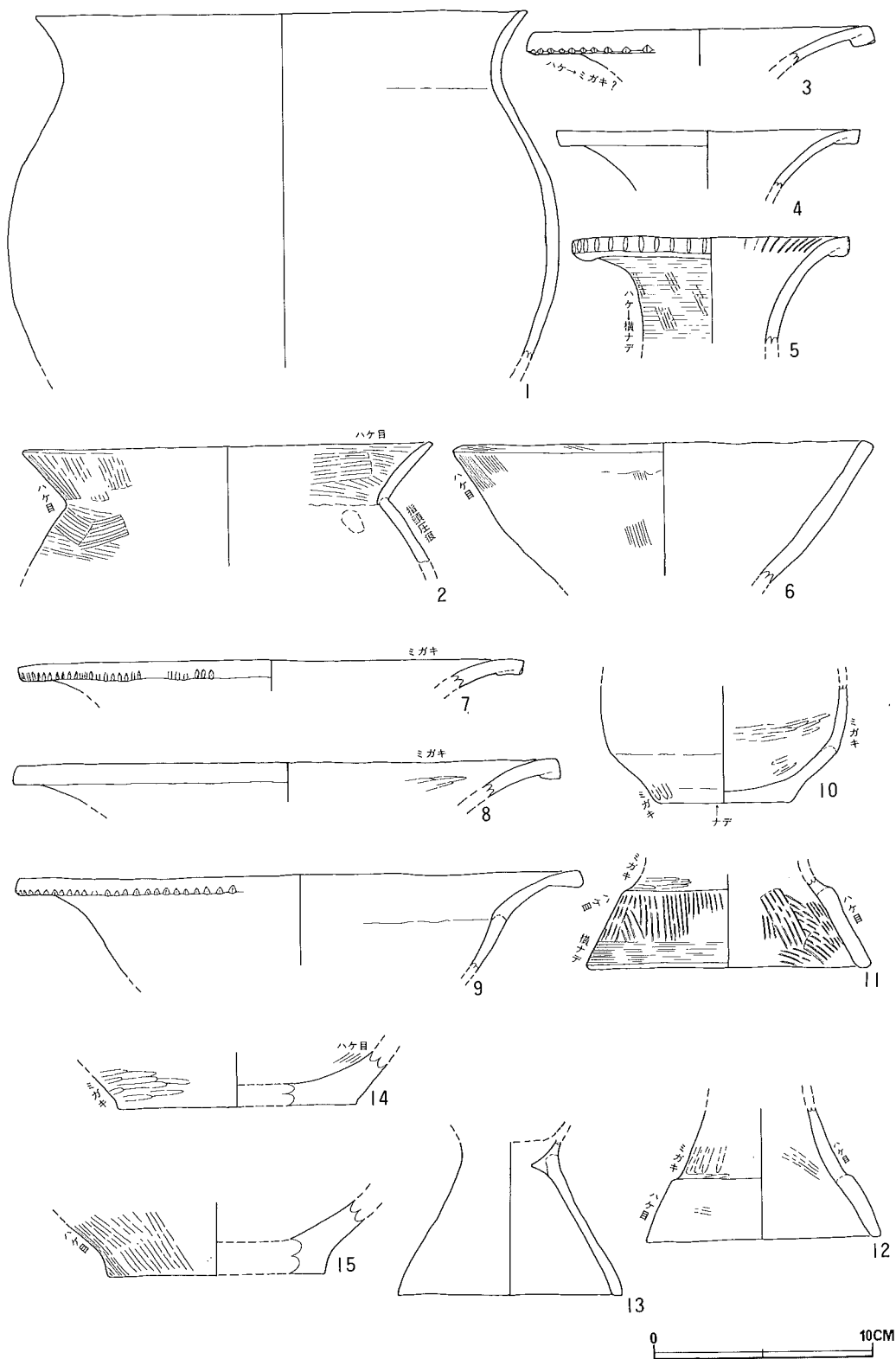
第4図 SK 1、SK 2 遺構実測図

いちじるしく摩滅しているため調整は不明である。色調は、にぶい橙色を呈し、胎土に1mm前後の砂粒を多く含む。2は、甕形土器で、口縁部から胴部上半にかけて約4分の1が残存している。口唇部は面がせまく刻み目は施していない。調整は、口縁部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目調整されている。胴部は、外面は横方向のハケ目、内面はナデられており指頭痕もみられる。色調は、暗褐色である。胎土は緻密で、焼成も良好である。

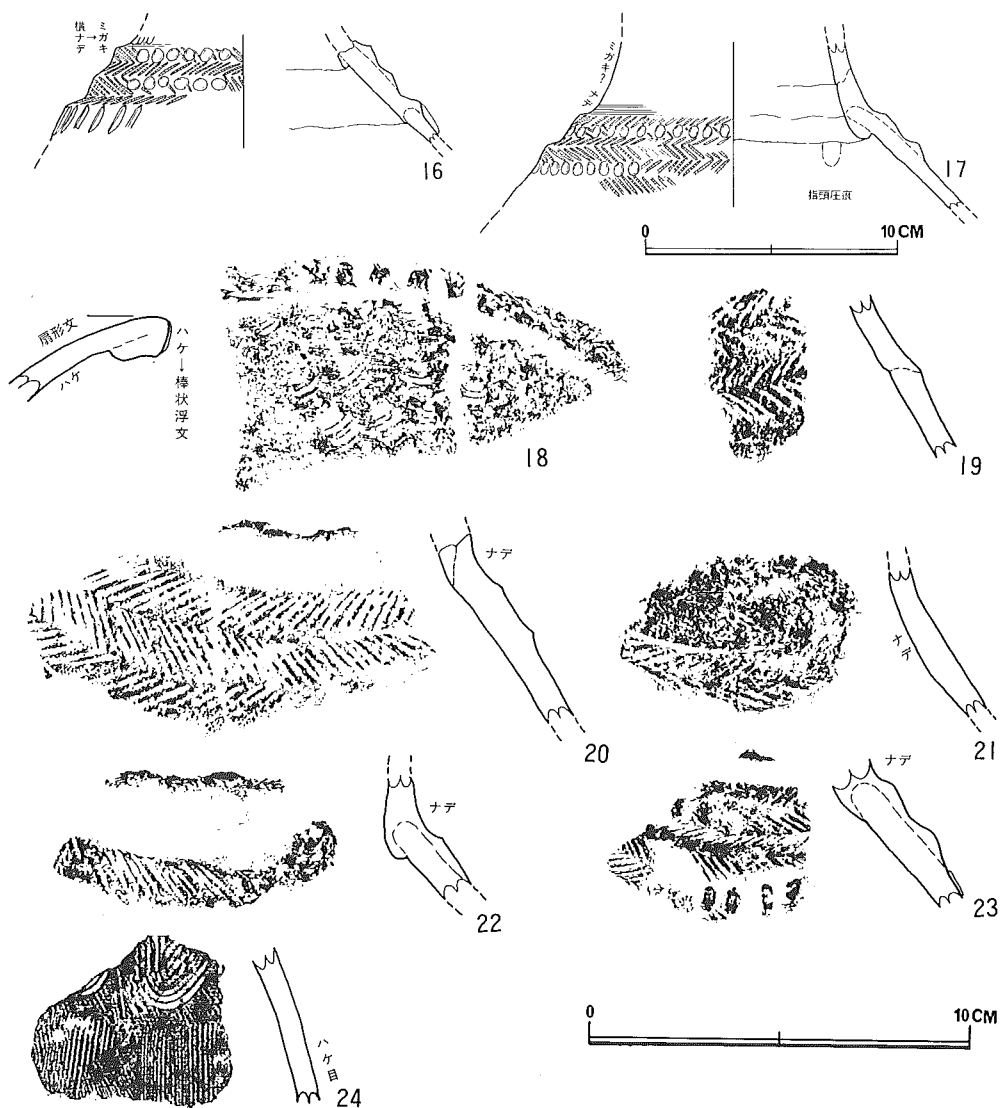
3は、壺形土器で、折り返し口縁をもつ。口縁部の約4分の1が残存している。折り返し部下端には刻み目を有する。調整は外面では、ハケ目の後にミガキ？によって調整されているようであるが摩滅がひどいため不明確である。色調は淡黄色で、胎土は砂粒を含み、焼成がやや軟質である。4は、壺形土器で口縁部約4分の1が残存する。折り返し口縁をもつ。摩滅がひどく調整は不明である。色調は淡黄色で胎土に砂粒を含む。焼成はやや軟質である。5は、壺形土器で口縁から頸部にかけて残存している。折り返し口縁を有し、刻み目を施す。内面には、篋状工具による施文を有する。外面の調整は、ハケ目の後に横ナデが施されている。色調は、にぶい褐色で、胎土は緻密である。焼成は良好。色調、胎土が10と似ており同一個体とも思える。6は、広口壺形土器で口縁部約5分の2が残存している。調整は外面には、ハケ目を施し、内面は、ナデ調整していると思われる。色調は、暗赤褐色～赤褐色を呈する。胎土は、砂粒を含み、焼成は良好である。

7は、高坏形土器で、折り返しが低い口縁である。坏部口縁約4分の1が残存している。折り返し部下端には刻み目を施している。器面が摩滅して調整は明確でないが、内面はミガキ調整を施していると思われる。色調は淡黄色を呈する。胎土は砂粒を含み、焼成も軟質である。8は、高坏形土器で坏部口縁約4分の1が残存し、折り返し口縁である。内面は、ミガキ調整を施している。外面は摩滅がひどく不明である。色調は、灰褐色である。胎土に砂粒を含み焼成はやや軟質である。9は、高坏形土器で、坏部約4分の1が残存している。坏部は内湾気味に立ち上がる。口唇部下端には、刻み目を施す。摩滅がはげしく調整は不明である。色調は、淡黄褐色である。胎土には、砂粒を含み、焼成はやや軟質である。

10は、壺形土器で胴下半から底部にかけて残存する。内面はミガキ調整されており、外面は摩滅して明確でないが、一部にミガキ調整がみられる。底部はナデ調整がみられる。色調は、にぶい褐色である。胎土は緻密で焼成は良好。5と同一個体？ 11は、高坏形土器で裾部約4分の1が残存する。調整は外面では、裾部にもうけられた段の上部では横方向のミガキが下部は縦方向のハケを施し最下部にハケの後に横ナデが施されている。内面はハケ目調整されている。色調は黒褐色である。胎土は緻密で焼成も良好。12は、高坏形土器で、裾部約5分の1が残存する。調整は、外面では段の上部で横方向のミガキの後に縦方向のミガキが施されている。段の下部は摩滅により明確でないが、ハケ目が施されている。内面も、ハケ目が施されている。色調は、黒褐色～暗灰褐色である。胎土は緻密で焼成はやや軟質である。13は、台付甕形土器の脚台部である。脚台部約4分の1が残存している。器面は、摩滅がはげしく調整は不明である。色調は、にぶい橙色である。胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質である。14は、壺形土器底部で、約4分の1残存している。調整は外面は横方向のミガキ調整されており、内面は、ハケ目



第5図 SK 1 出土遺物 (1)



第6図 SK 1 出土遺物（2）

がみられる。色調は、にぶい黄橙色を呈している。胎土は緻密で焼成も良好である。底部には木葉痕がみられる。15は壺形土器底部で約5分の1残存している。調整は、内面は不明であるが外面は斜行のハケ目を施す。色調は、淡黄色を呈している。胎土は緻密で、焼成は良好である。16は、壺形土器の頸部付近のみの破片である。断面三角形の突帯に櫛状の工具で羽状刺突を行って、その後小円形浮文を施している。また羽状刺突文帯下端に棒状浮文を貼付している。色調は外面は黒色、内面は灰褐色である。胎土は砂粒を含み焼成は良好。17も、壺形土器の頸部付近で、羽状の刺突文を有する。上段の円形浮文は全周すると思われる。内面には指頭圧痕もみられる。

18は、壺形土器の口縁部である。折り返し口縁で内面に扇形文がみられる。19～24は、壺形土器の破片である。24には、波状の櫛描文がみられる。

(2) SK 2 (第4図)

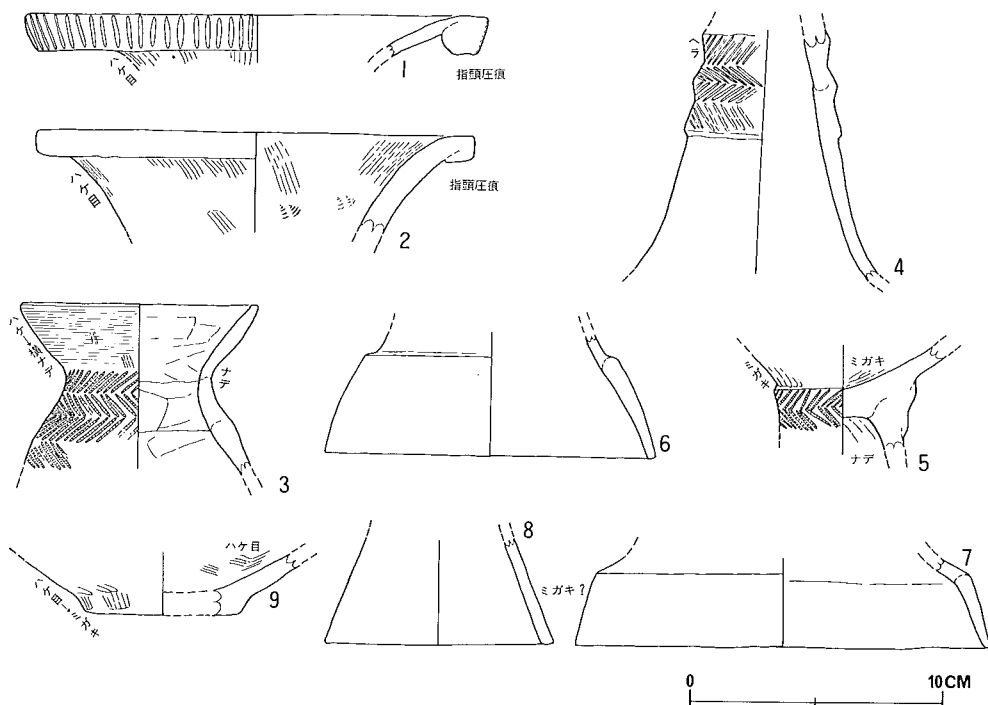
SK 2は、SK 1の西側に接して位置している。長軸は、2.5m、短軸85cm深さ50cmの隅丸の長方形を成す。長軸方向は、N-11°-Eを示す。底部は、北側へゆるやかに傾斜する。

覆土は、1層黒褐色土(粘性が多少ある。)、2層黒褐色土(1層よりも黒っぽい。粘性は多少あるがしまりはない。)、3層黒灰色土(多少砂質の粘土層でしまりはない。炭化物の粒子を含んでいる。)である。

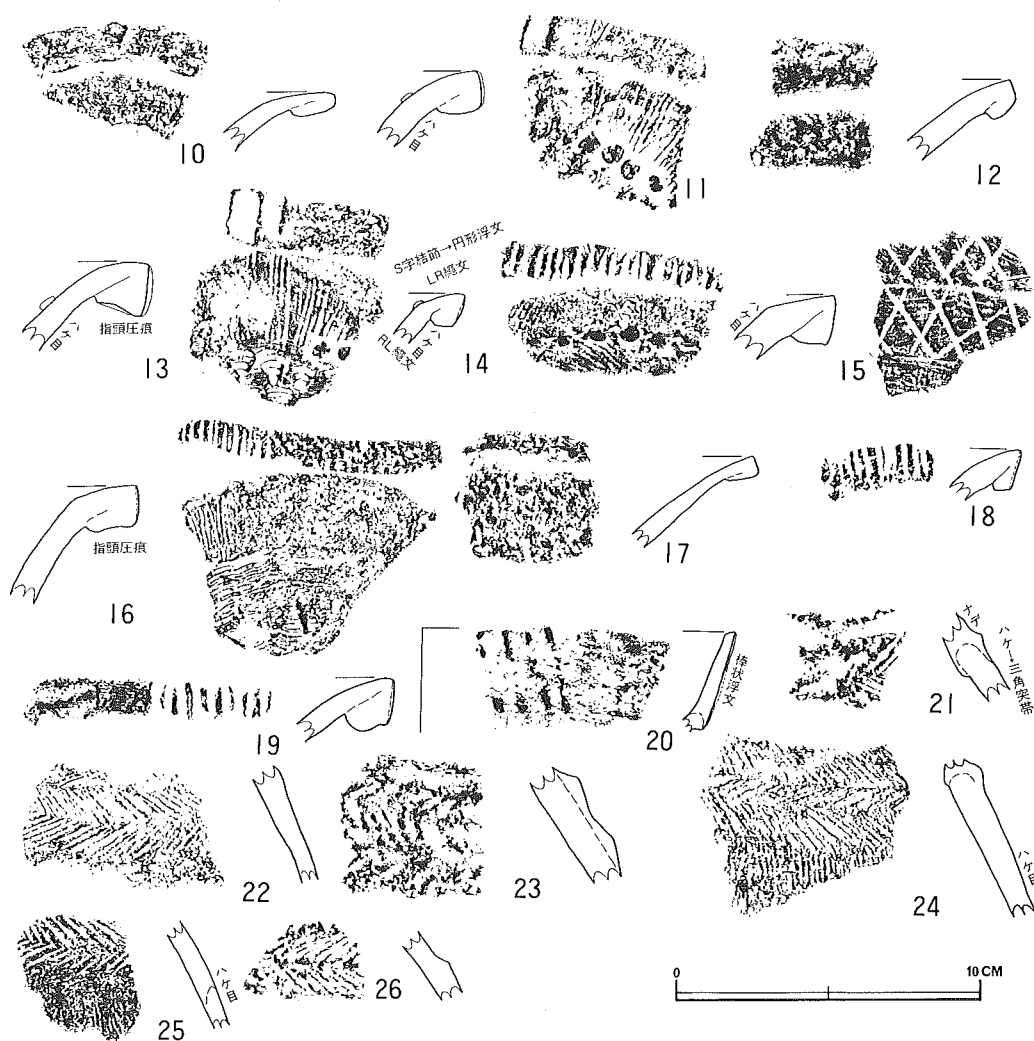
出土遺物(第7、8図)

1は、壺形土器の口縁部で約4分の1が残存している。折り返し口縁をもち、折返し部には刻み目をもつ。調整は、摩滅がひどく不明確であるが、外面には、ハケ目がみられる。色調は、にぶい橙である。胎土は緻密で、焼成はやや軟質である。2は、壺形土器口縁部で約5分の2が残存している。折り返し口縁を有する。摩滅によって不明確であるが、内面に扇形文を有しその上部は、縦位の櫛描文が施されている。外面調整はハケ目がみられる。口唇部下端には指頭圧痕がみられる。色調は、にぶい橙色である。胎土は砂粒を含み、焼成もやや軟質である。3は、壺形土器である。口縁部は、ハケ目の後に横ナデが施されている。頸部付近には、羽状の刺突文を施す。内面は、篋によるナデが施される。色調はにぶい褐色を呈す。胎土に砂粒を含み焼成は良好である。

4は、高坏形土器の脚部である。数段の低い断面三角形の突帯に施文された。摩滅により調整は不明である。色調はにぶい橙色である。胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。5は、高坏形土器である。接合部に低い突帯を貼付後櫛状工具による羽状刺突文が施されている。



第7図 SK 2 出土遺物(1)



第8図 SK 2 出土遺物 (2)

調整は坏部は内外面ともにミガキが施され、脚部内面は篋状工具によるナデが行われている。色調は、明褐色である胎土に砂粒を含み焼成はやや軟質である。6は高坏の脚部である。摩滅がはげしく、調整は不明である。色調は、橙色を呈する。胎土には砂粒を含み、焼成は軟質である。7は高坏形土器の脚部である。摩滅により、調整は不明である。色調は灰褐色を呈する。胎土には砂粒を含み焼成はやや軟質である。

8は、台付甕形土器の脚台部である。摩滅がひどく調整は不明である。色調は灰赤色を呈している。胎土に砂粒を含み、焼成は軟質である。9は、壺形土器底部である。外面はハケ目の後にミガキ調整され、内面はハケ目がみられる。底面には単子葉類の圧痕がみられる。

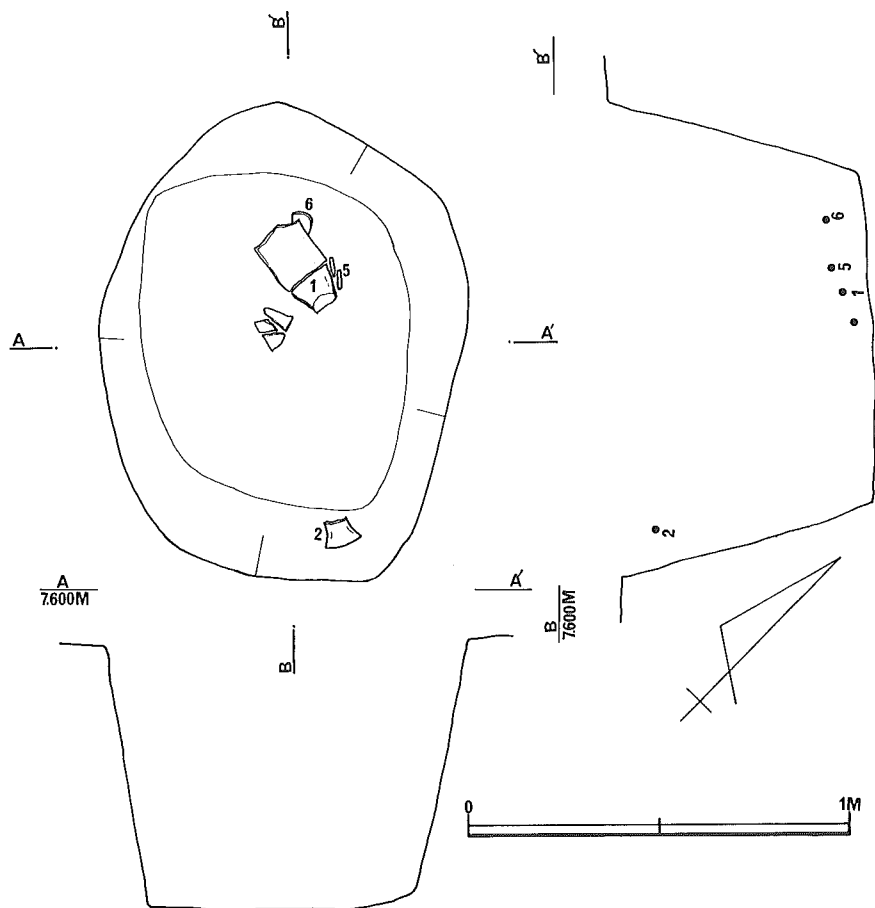
10～20は、いずれも壺形土器口縁部分である。20を除き折り返し口縁を有する。11の内面は縦位の櫛描文の後に円形浮文が施されている。折り返し部には棒状浮文を有す。13の内には、櫛描文の後に円形浮文を有しその下部に扇形文を施す。折り返し部には棒状浮文を貼付し下端

には、指頭圧痕も顕著にみられる。14は、内面にS字状結節縄文を施しその後円形浮文を施す。15は、ハメ目の後櫛刺突斜格子文を有する。20は、壺形土器の口縁部で、外面には棒状浮文を施す。摩滅がひどいため調整等は不明である。21～26はいずれも壺形土器の破片で羽状刺突文が施されている。

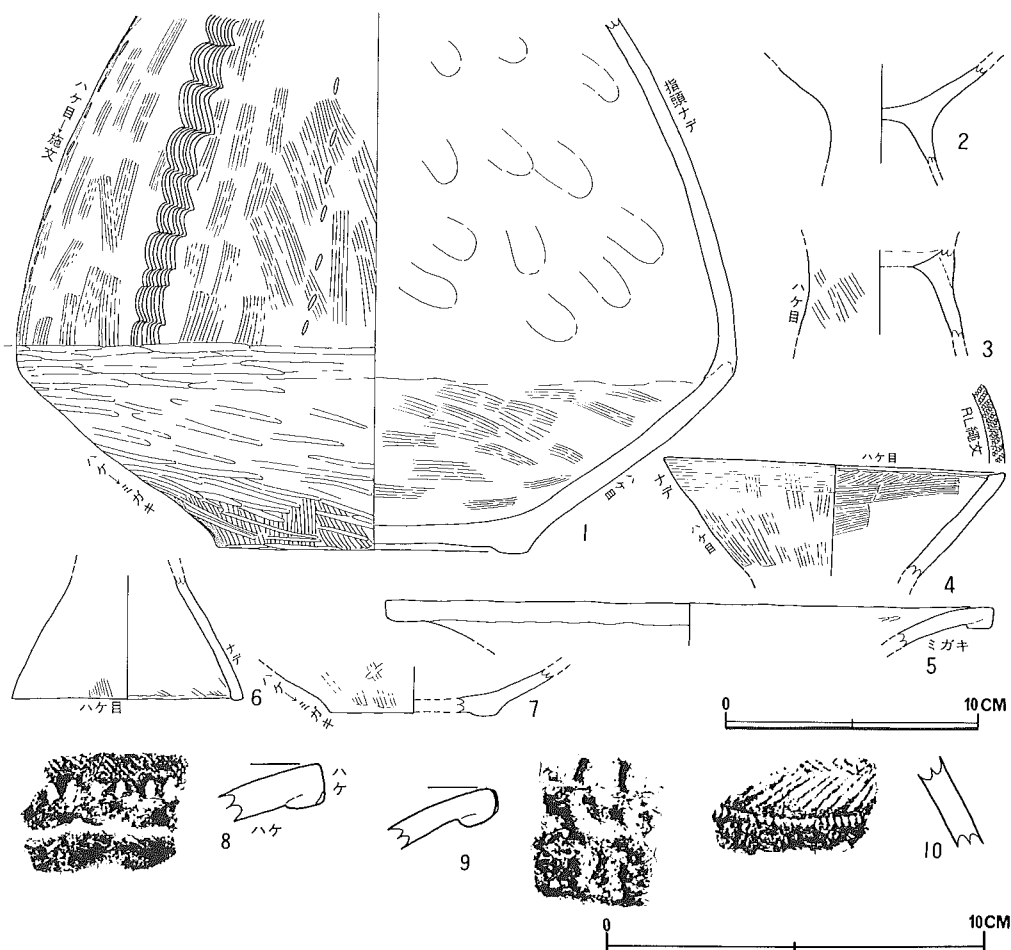
(3) SK 3 (第9図)

SK 3は、SK 2の南西約2.5mに位置している。長軸1.25m、短軸95cm、深さ70cmである。壁が崩れているため不整の長方形を呈するが、本来長方形を成すと思われる。長軸方向はN-39°-Wである。

覆土は、1層黒褐色土（粘性が多少ある。）、2層暗灰色粘土層（粘性があるが、しまりは少ない。）、3層暗灰色土（2層に砂が混じった砂質の粘土層。）である。



第9図 SK 3 実測図



第10図 S K 3 出土 遺 物

出土遺物 (第10図)

2 の高坏は、覆土上層より出土しているが他は下層からの出土である。

1 は、壺形土器である。底部と胴部は約 4 分の 1 が残存している。外面には縦位に櫛描波状文と刺突文を間隔をおいて施文している。胴部径より、文様は 5 単位と思われる。調整は、外面ではハケ目を施したのち施文、下部ではミガキを行っている。内面は、指頭ナデが行われ下部はハケ目がみえる。色調は、暗黄褐色土である。胎土には、砂粒を多く含み、焼成は良好である。

2 は高坏形土器である。調整等は摩滅がひどく不明である。色調は、灰黄褐色である。胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質である。3 は、高坏形土器と思われる脚部である。外面にハケ目調整を施している。他は摩滅により確認できない。色調は橙色である。胎土に砂粒を含み、焼成は、やや軟質である。5 は、高坏形土器口縁部である。折り返し口縁をもつ。内面にはミガキが施されているが他は摩滅によって確認できない。折り返し部下側には指頭圧痕がみられる。色調は、灰褐色である。胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質である。

4 は壺形土器口縁部である。外面は、ハケ目の後に篋状工具による横ナデが行われている。

内面は細いハケ目である。また、口唇部には、RL縄文を施す。色調は、暗黄褐色を呈し1の壺形土器と類似している。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。

6は、台付甕形土器の脚台部である。外面はハケ目を施し、内面は、ハケ目の後ナデを行っている。摩滅により調整は不明確である。色調は黄褐色を呈する。胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質である。7は、壺形土器底部である。外面はハケ目の後ミガキを施す。色調は黄褐色である。胎土は砂粒を含み、焼成は軟質である。

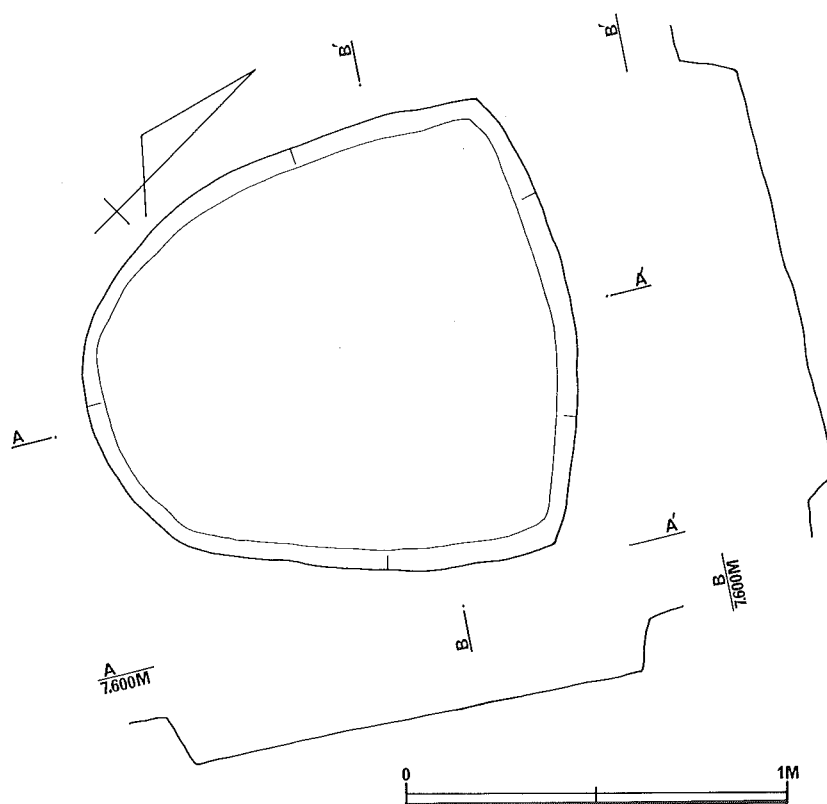
8は高坏形土器と思われる。折り返し口縁で、折り返し部下端には刻み目を有する。9は壺形土器口縁部である。折り返し口縁で、棒状浮文を有する。10は壺形土器である。

(4) SK 4 (第11図)

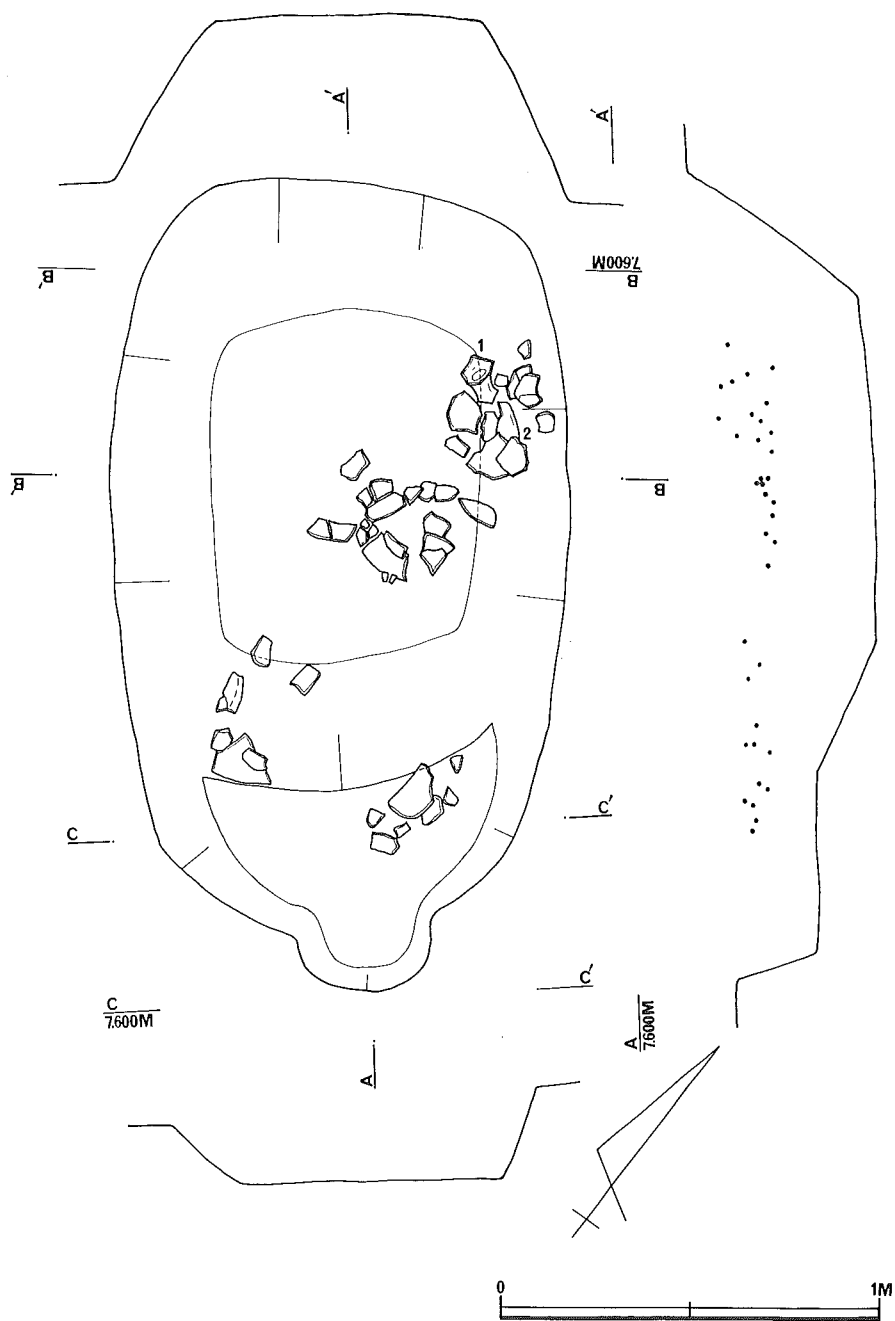
SK 4は、調査区中央付近、SK 3より西南西へ約7 mに位置している。長軸1.3m、短軸1.2m、深さ15cmの隅丸三角形様を呈している。深さの浅い土壌であるが上部はかなり削平されているものと思われる。長軸方向は、N-32° - Eである。

覆土は、一層で黒褐色土(粘性は多少あるが、しまりのない砂質の土。)である。

出土遺物は、弥生土器の小片が数片出土しただけにとどまったために、図示できなかった。



第11図 SK 4 遺構実測図



第12図 S K 5 実測図

(5) SK 5 (第12図)

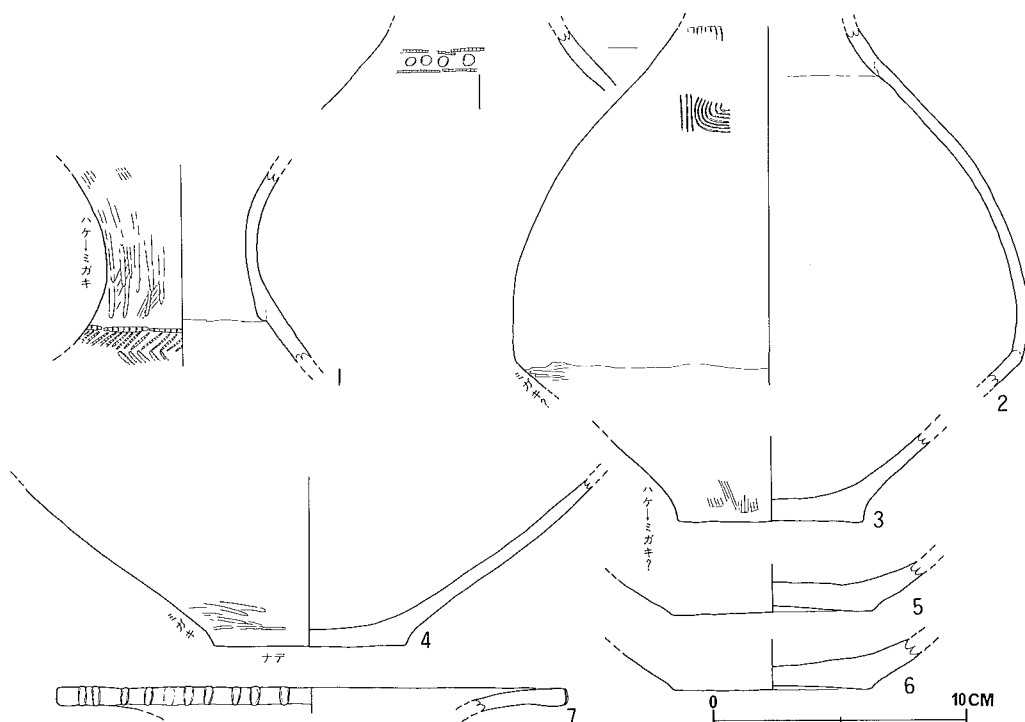
SK 5は、調査区中央付近、SK 4の西約1.8mに位置している。長軸は2.15m、短軸は1.2m、深さは、最深部で45cmの隅丸長方形で、南側に張り出し部を有する。底部は中央からやや南で一段を有している。長軸方向はN - 38° - Wである。

覆土は、1層黒褐色土(粘性が多少あるが、しまりのない土である。)2層暗灰色土(砂を含んだ粘土層でしまりが無い。)である。

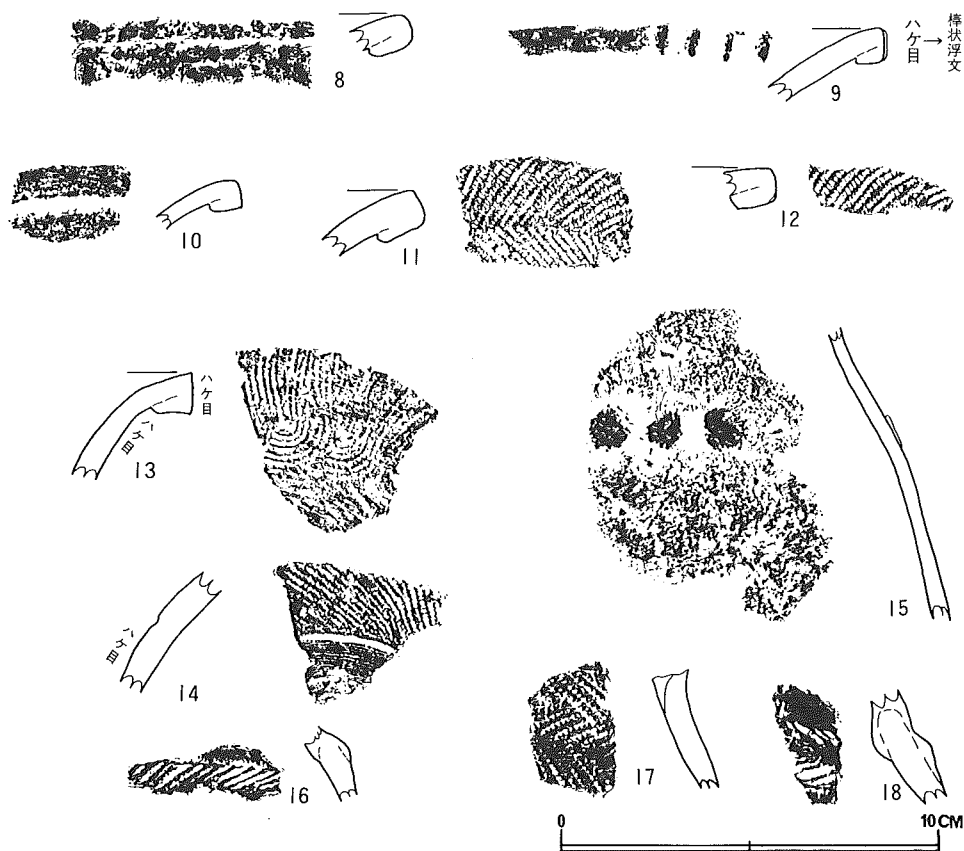
出土遺物(第13、14図)

本遺構からは、かなりまとまって土器が出土している。

1は、壺形土器である。外面には櫛状工具による刺突文を施している。調整は外面ではハケ目の後にミガキを行う。内面は不明である。色調は、暗黄褐色である。胎土には、砂粒を含み焼成はやや軟質である。2は壺形土器である。摩滅がひどく調整等は不明確な点が多い。外面には、頸部において、円形浮文を施し、その上下には櫛押圧文を有する。また、櫛描文も施されているが、一部しか確認できないので、構成は明確でない。調整は外面の胴下半部でハケ目の後ミガキを施している。色調は淡橙色である。胎土に砂粒を含み、焼成は軟質である。また、底部は3の底部と胎土、色調が似ており、同一個体と思われる。4は、壺の底部である。外面には、ミガキを施している。底面にナデを施す。色調は暗黄褐色で、胎土に砂粒を含み焼成はやや軟質である。1の壺と似ており、同一個体とも思える。5は壺底部で上げ底である。調整は不明である。胎土に砂粒を多く含み焼成はやや軟質である。色調は、暗灰色である。6は、壺形土器底部で上げ底気味である。色調は黒褐色で胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。



第13図 SK 5 出土遺物(1)



第14図 SK 5 出土遺物 (2)

7は、壺形土器口縁部である。口唇部外面には棒状浮文を施す。摩滅により調整は不明である。色調は、黄橙色である。胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質である。

8～14はいずれも、壺形土器の口縁と思われる。14は、口唇部付近を欠損するが、他は折り返し口縁を有する。13は口縁内面に櫛描扇形文が施されている。15～18は壺形土器の破片である。15は大型の円形浮文を貼付する。

(6) SK 6 (第15図)

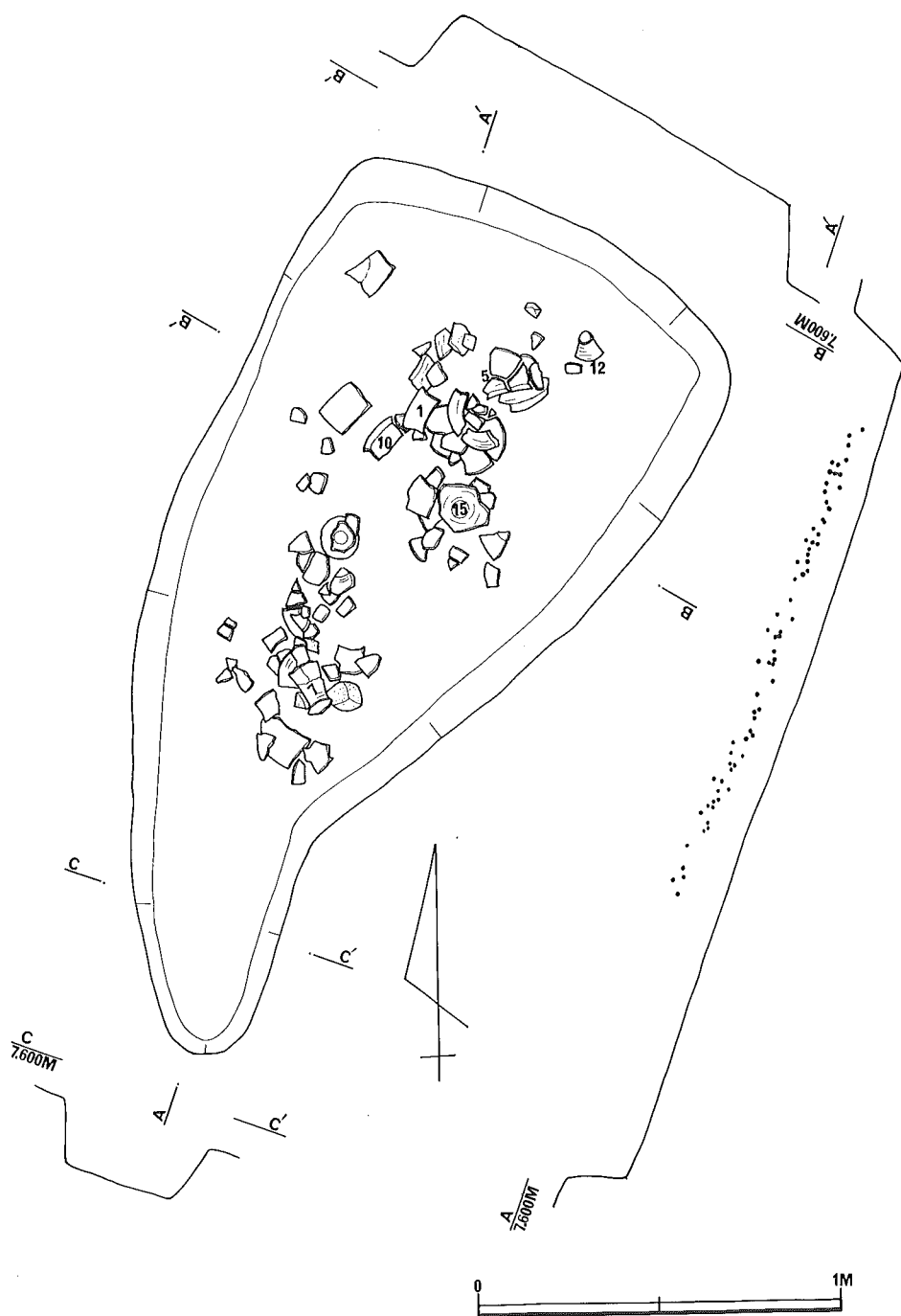
SK 6は、調査区中央、SK 4の北約2.7m、に位置している。長軸2.5m、短軸1.25m、深さ20cmのいちじく形を呈する。SK 1と類似する形態である。長軸方向は、N-33°-E。

覆土は、1層で黒褐色土(砂質の粘土層である。しまりはあまりない。)である。上部は削平されているため浅いものと思われる。

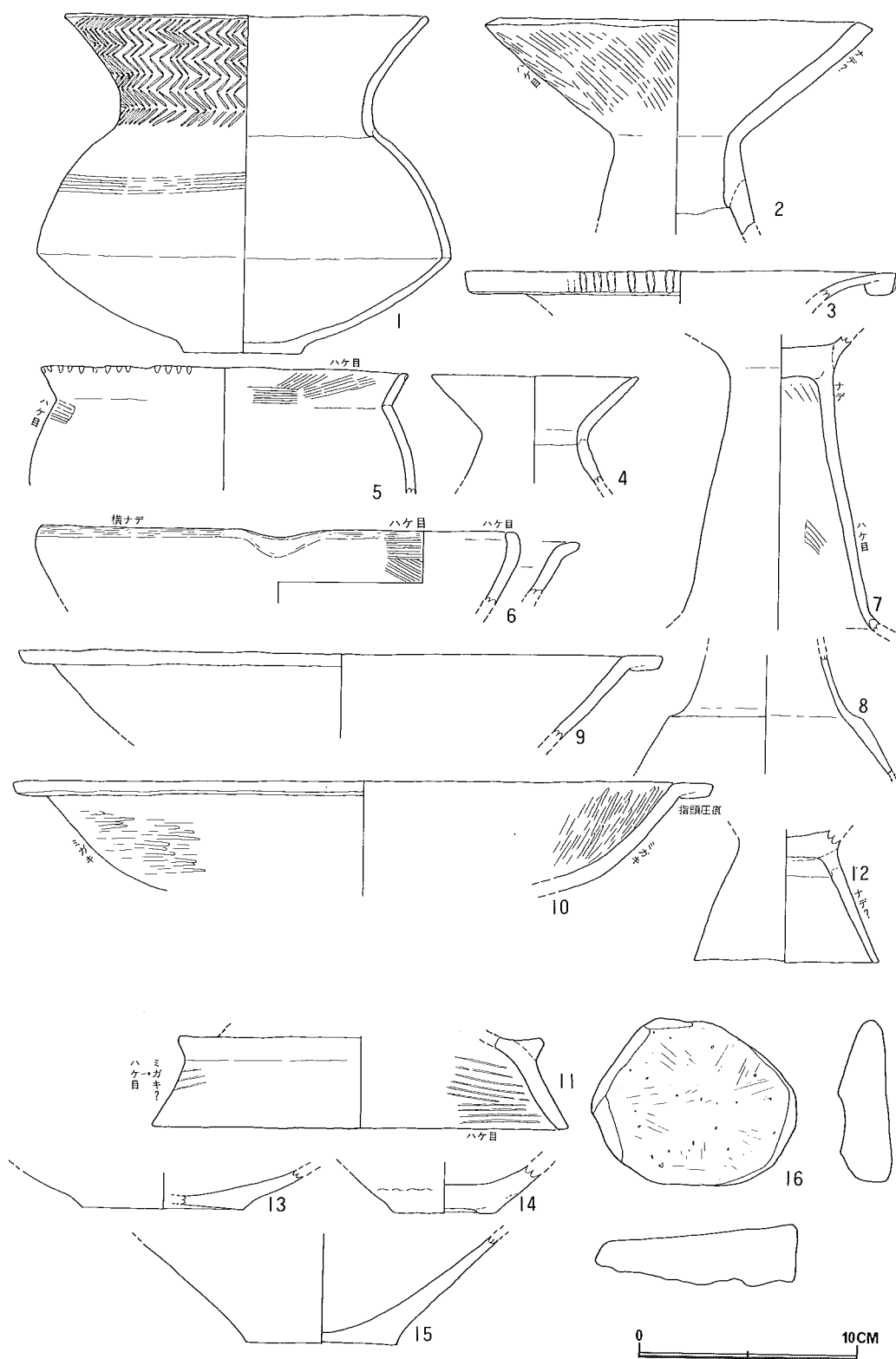
出土遺物(第16図)

本遺構からは、深さが浅いにもかかわらず、遺物は、かなりまとまった状態で、ほぼ全体から出土している。

1は広口で肩部から胴部にかけて張る、小型の壺形土器である。胴部の約4分の1が欠損する。口縁部から頸部にかけて篋状工具による羽状の刺突文を施し、肩部には、櫛描横線文を有す



第15図 S K 6 実測図



第16図 S K 6 出土遺物

る。調整は、摩滅により不明である。色調は、橙色である。胎土に砂粒を含み、焼成は軟質である。2は、壺形土器の口縁から頸部にかけて約2分の1残存している。調整は、口縁部外面は荒いハケ目で、内面はナデられていると思われる。色調は浅黄橙色である。胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質である。3は、壺形土器口縁部である。約4分の1が残存している。折り返し口縁を有し、棒状浮文を施す。調整は摩滅により不明である。色調は浅黄橙色である。砂粒を含み、焼成は軟質である。4は壺形土器で口縁から頸部にかけて約2分の1が残存する。摩滅により、調整は不明である。色調は、淡黄色である。胎土に砂粒を含み、焼成は軟質である。

5は、甕形土器である。口縁部から胴上半にかけて約4分の1が残存している。口唇部には刻み目を有する。調整はハケ目を施している。内外面とも摩滅により不明確である。色調は、暗黄褐色である。胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質である。

6は片口で、口縁部付近約4分の1が残存している。外面は、ハケ目調整を行ない、口唇部近くでは横ナデを施している。口唇部はハケ目によって調整されている。色調は、褐灰色を呈している。胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質である。

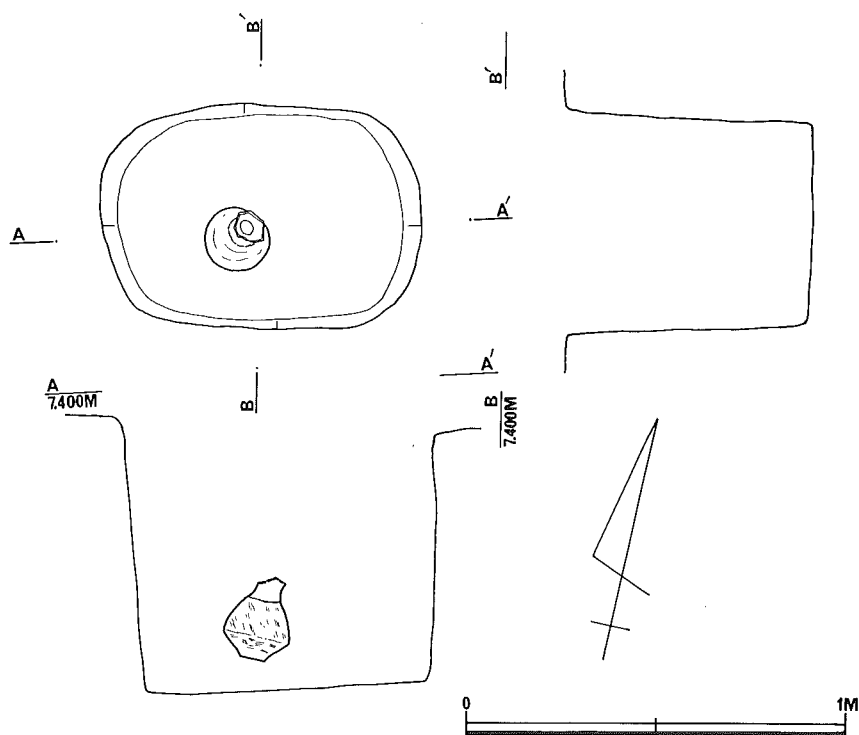
7は、高坏形土器脚部である。調整は摩滅により、不明確であるが内面の接合部付近では、篋状工具によるナデが施され、他はハケ目がみられる。色調は、淡黄橙色である。胎土には砂粒を多量に含み、焼成は軟質である。9と胎土が類似しており同一個体か？ 8は、高坏形土器脚部である。摩滅がはげしく調整等は、不明である。色調淡黄橙色で胎土に砂粒を含み、焼成は軟質である。9は、高坏形土器の坏部である。折り返し口縁を有する。摩滅がはげしく調整は不明である。色調は淡黄橙色～橙色を呈する。胎土には、砂粒を多く含み、焼成は軟質である。7と同一個体？ 10は高坏形土器の坏部である。折り返し口縁を有し、折り返し部下側には指頭圧痕がみられる。外面は横方向のミガキが、内面は縦方向のミガキを施している。色調は、黄橙色である。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。11と胎土、色調が類似しており脚部は不明であるが同一個体と思われる。11は、高坏形土器脚部で高い突帯を有する。内外面ともに荒いハケ目調整を行っている。10と同一個体と思われる。

12は台付甕形土器の脚台部である摩滅により、調整は不明確であるが、内面はナデを施すと思われる。色調は、黄橙色である。胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質である。13は壺形土器底部で、上げ底気味である。調整は不明である。色調は灰褐色で、胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質である。14は、壺形土器底部で、輪状底である。調整は不明である。色調は、暗灰色で、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。15は、壺形土器底部である。調整は不明である。色調は、淡黄橙色で胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質である。

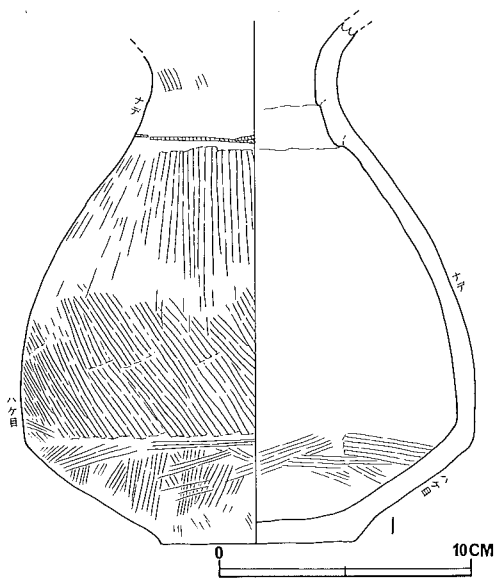
16は、砥石と思われる。凝灰岩質である。大きさは現存で9.5cm×7.5cmで、重さは210gである。火を受けており小破片で出土した。

(7) SK 7 (第17図)

SK 7は、調査区南側、SK 5の南西約8.2mに位置している。長軸85cm、短軸60cm、深さ



第17図 S K 7 実 測 図



第18図 S K 7 出土遺物

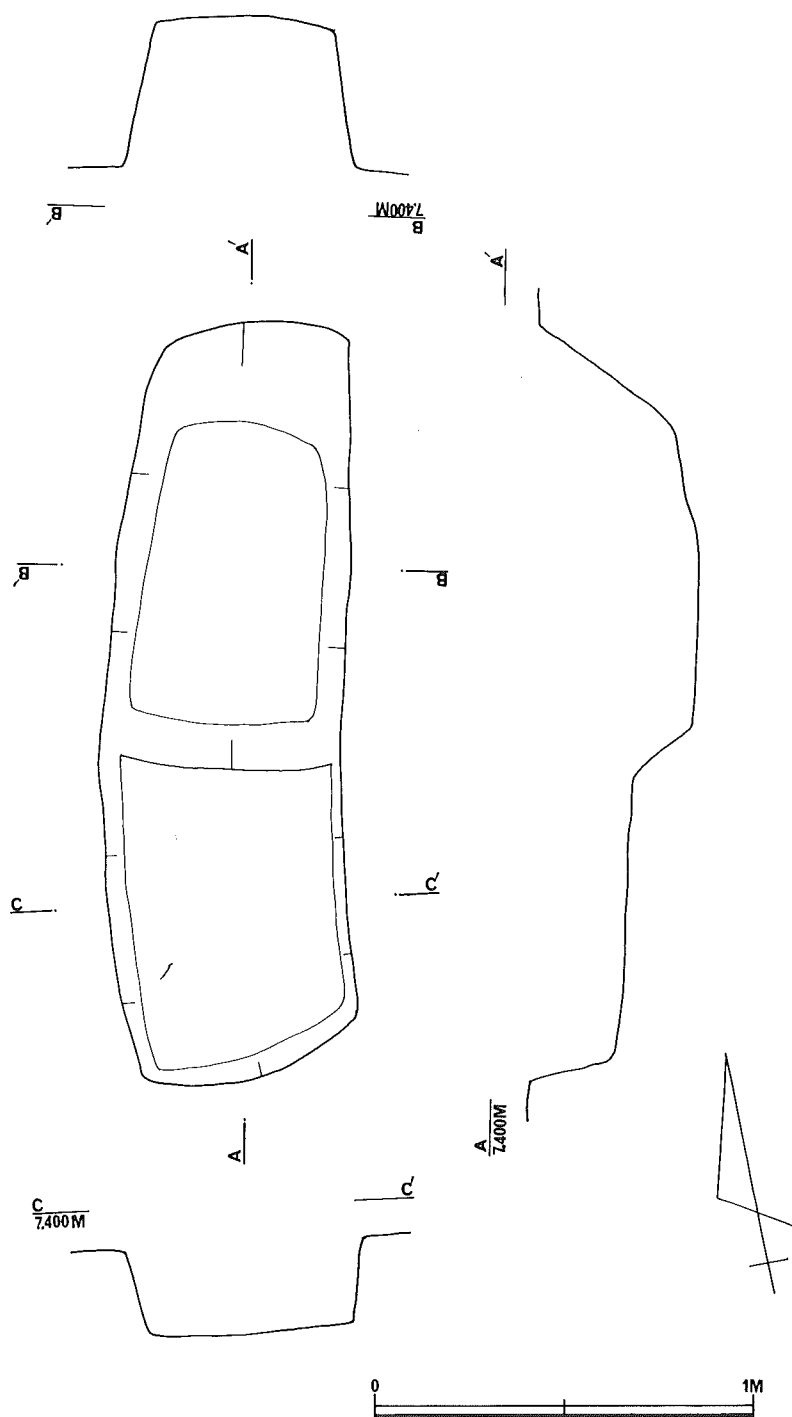
73cmの隅丸長方形を呈する。SK 3と類似した形と思われる。長軸方向は、N-75° - Eである。

覆土は、1層黒褐色土（多少粘性がある砂質の土。）、2層黒灰色粘土（粘性が強い。）、3層灰色粘土層（砂を含む。）である。

出土遺物（第18図）

出土遺物は、1の壺形土器と他には数片の破片だけである。1は2層中よりの出土であり、ほぼ単独出土に近い。

1は壺形土器で口縁部を欠くが他は完存している。頸部には、一条の櫛刺突横線文を施している。外面は、ハケ目調整を施す。内面は、上半部はナデ、下半部はハケ目である。色調は暗黄橙色を呈している。胎土に砂粒を



第19図 S K 8 実測図

多く含んでおり、焼成はやや軟質である。

(8) SK 8 (第19図)

SK 8は、調査区西側、SK 7の西4.7mに位置している。長軸2m、短軸65cm、深さ42cm(段上は、22cm)の隅丸長方形を呈す。ほぼ中央で一段を成し北側が深くなっている。SK 2と類似形態を示す。長軸方向は、N-12°-Eである。

覆土は、1層黒褐色土(粘性があり、しまりも多少ある。)2層黒灰色粘土層(粘性が強い。下部は砂が混じってくる。)である。

出土遺物は、弥生土器の破片が33片出土しているが小片で摩滅がひどく図示できなかった。

(9) SX 1 (第20図)

SX 1は、調査区東側に位置している。深さ20cm前後で、覆土には、暗灰色粘土層(しまりがあり、粘性も強い。)が堆積している。本遺構は、南北及び東へも及んでいるため、その全貌を明らかにできず、遺構の性格については不明である。確認調査の段階では、包含層として考えられたが、立ち上がりもしっかりしており、何らかの遺構(池状遺構)とも考えられるであろう。

出土遺物(第21図)

遺物は、テンバコで2箱分出土しているが、出土状態は、全面にちらばっており、破片で、しかも、非常に摩滅した状態のものがほとんどである。

1～5、21が須恵器で、他は土師器である。

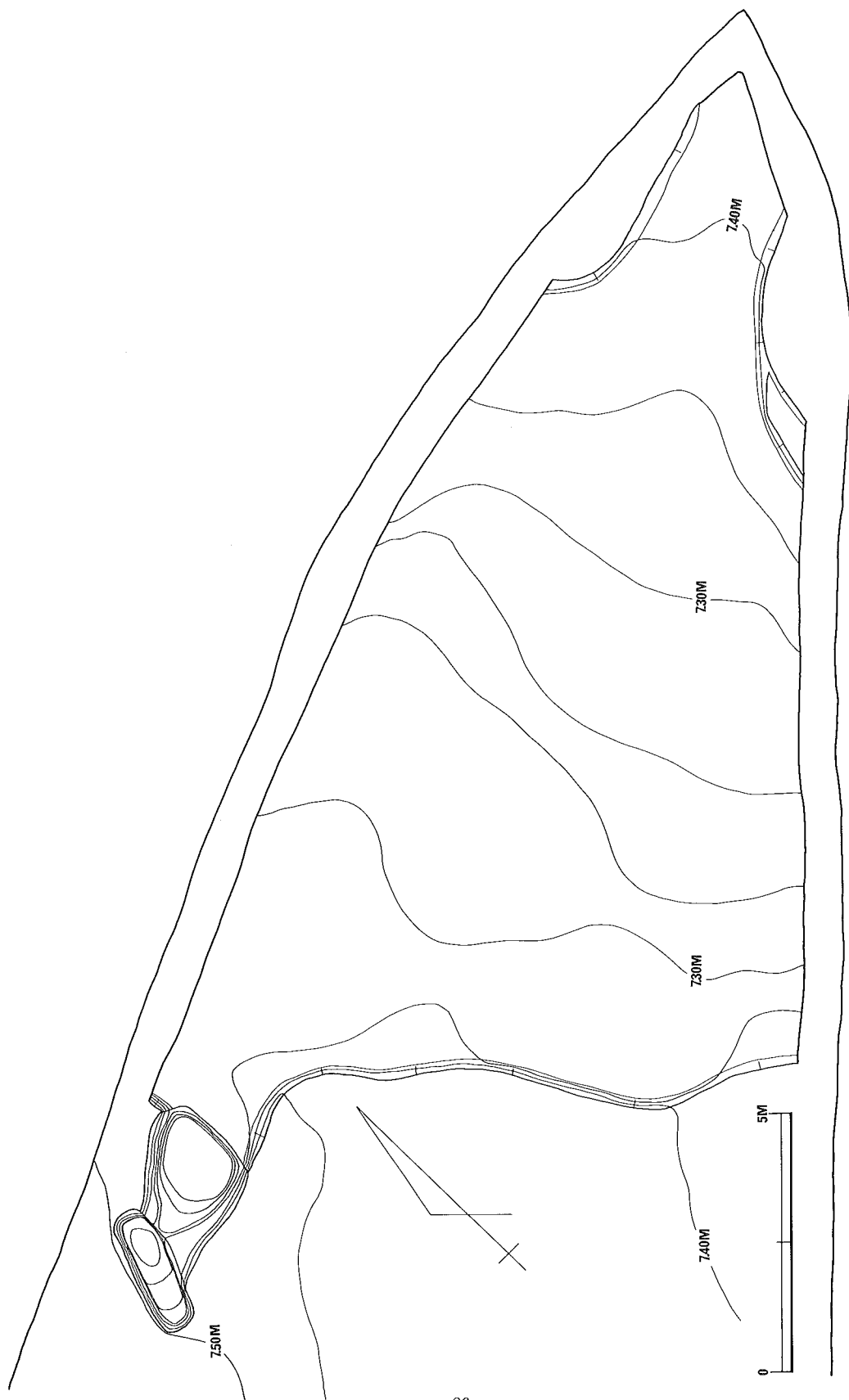
1は坏身で推定口径13.7cmである。受部の立ち上がりが短く内傾する。全体の5分の2が残存している。胎土は緻密で焼成も良好である。色調は暗灰色である。2は、坏身で、推定口径12cmである。全体の4分の1が残存している。受部の立ち上がりが内傾する。胎土は緻密であるが焼成はやや軟質である。色調は灰白色である。3は坏身で、推定口径13cmである。全体の約4分の1ほど残存している。胎土は緻密で焼成は良好である。色調は灰白色である。

4は、推定口径13cmの坏蓋である。頂部は篋削りが施される。ロクロは反時計回りである。胎土に砂粒を含んでいる。焼成は良好である。色調は暗灰色を呈する。5は坏蓋で推定口径12.5cmである。全体の4分の1が残存している。色調は灰白色である。胎土は緻密で、焼成はやや軟質である。

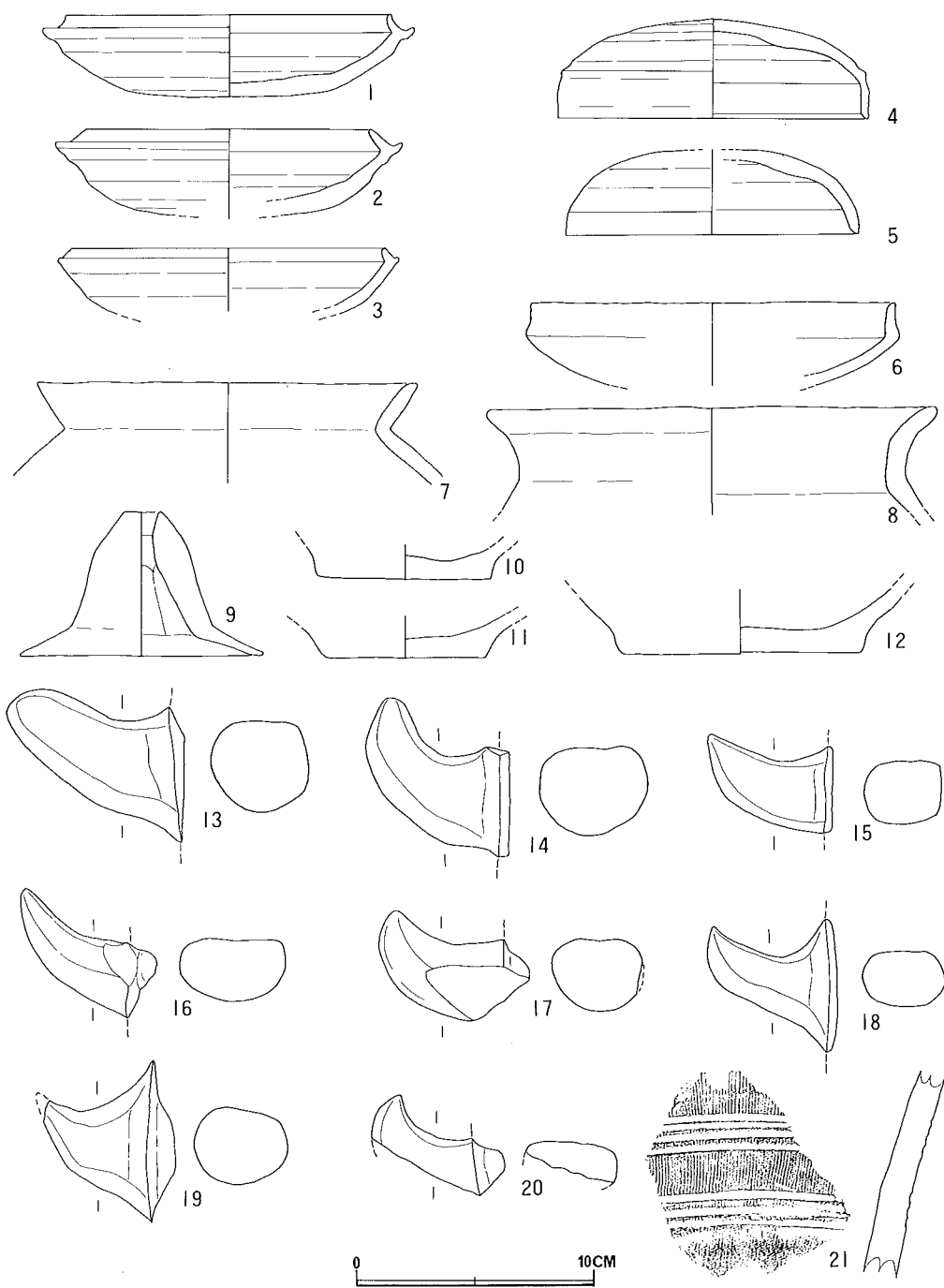
6は、土師器の坏で破片であるが、口径を15.3cmと推定し、図示したものである。摩滅がひどく調整等は不明である。7、8は、甕形土器の口縁部分である。9は、高坏形土器の脚部である。脚部から屈曲して裾部が広がっている。色調は黄橙色である。胎土は緻密で焼成はやや軟質である。10～12は甕形土器の底部である。

13～20は、甌などの把手と思われる。胎土や色調、形態からいずれも別個体と思われる。

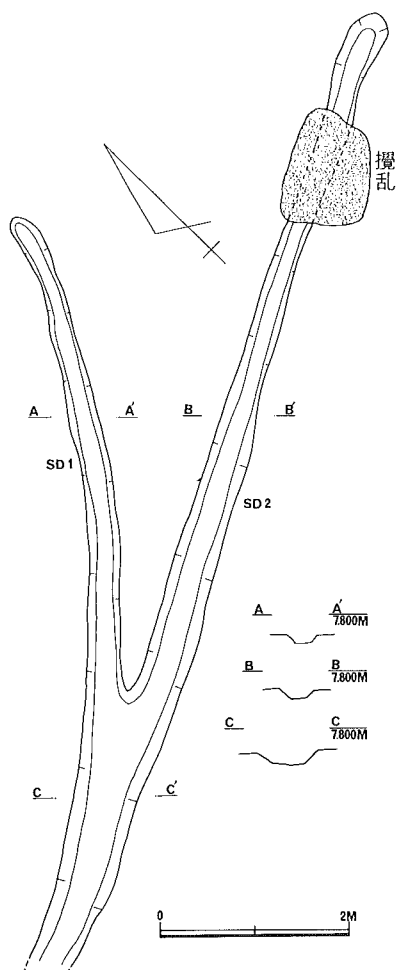
21は甕形土器口縁付近と思われる。



第20図 S X 1 実測図



第21図 S X 1 出土遺物



第22図 SD 1、SD 2 実測図

(10) SD 1、SD 2 (第22図)

SD 1、SD 2 は、調査区西側に位置しており、東西方向にはしる溝である。

SD 1 は、幅20~30cm、深さ10cm程度の浅い溝で、SD 2 と交わる。交わった後は、幅50cm前後で深さ15cm前後である。

SD 2 は、幅20~40cmで、深さ10cm前後である。

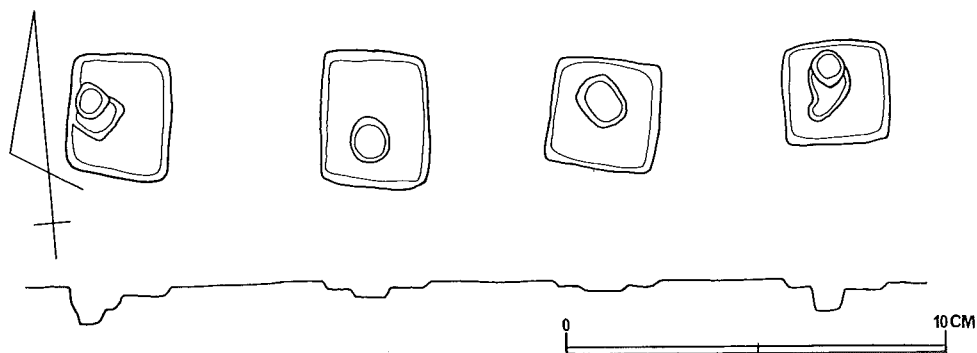
覆土は、SD 1、SD 2 とともに黒褐色土（粘性があり、しまりも多少ある）が堆積している。

出土遺物は、SD 2 から土師器片が数片と須恵器片1片が出土しているが、いずれも小片で図示できないが、古墳時代の遺構と考えられる。

(11) SB 1 (第23図)

SB 1 は、調査区西側、SD 1 の北に位置する。長方形の掘り方をもつピット列である。一列のピットしか検出できなかったが何らかの建物跡と思われる。いずれのピットも浅く、かなり削平されている。覆土は黒褐色土（粘性多少あり）である。主軸方向は、N-87°-Wである。

出土遺物は、弥生土器小破片を出土し弥生時代とも考えられるが、調査区内には、古墳時代の遺構も存在する。耕作土からは、奈良時代と思われる須恵器小片もみられるので、時期は不明確である。



第23図 SB 1 実測図

(12) SB 2 (第24図)

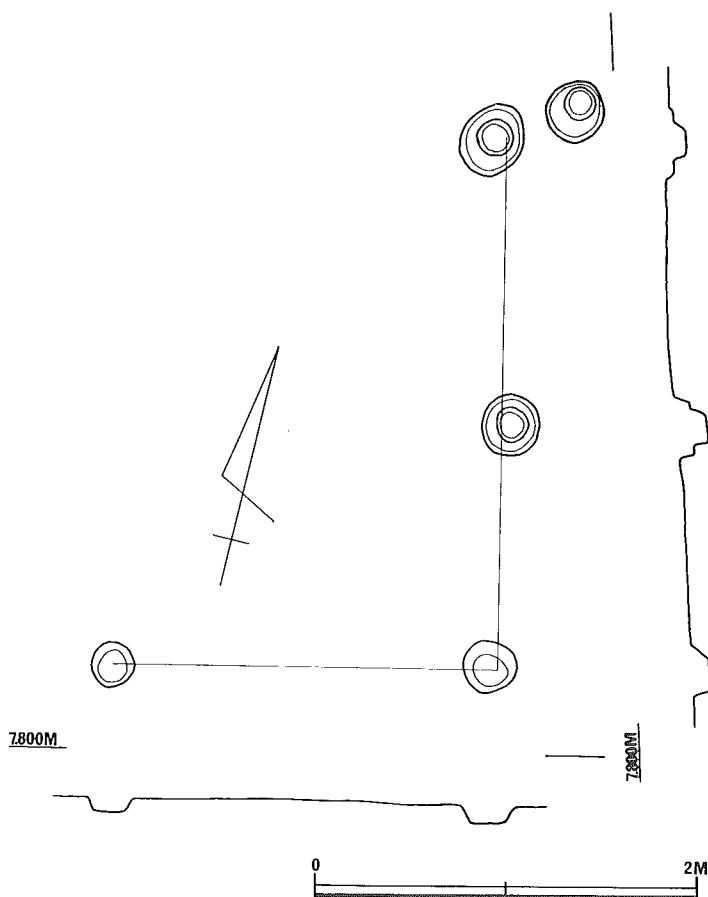
SB 2は、SB 1の北西約4 mに位置している建物跡と思われる。南北2.8m、東西2 mで直径25cm前後の円形のピットを有する。深さは、10～15cmである。主軸方向は、 $N-13^{\circ}-W$ である。

覆土は黒褐色土を示している。出土遺物がないため、時期は不明である。

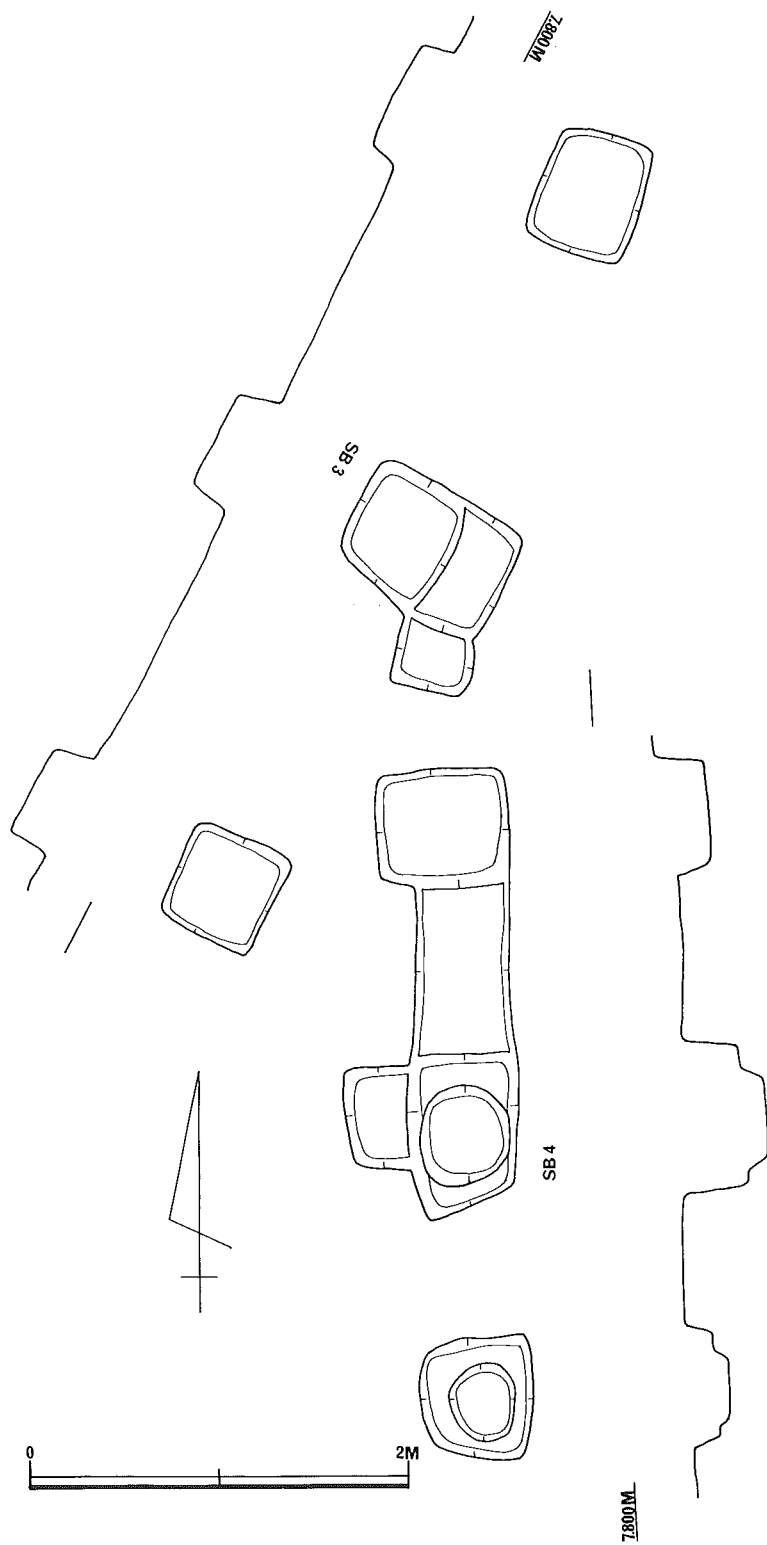
(13) SB 3、SB 4 (第25図)

SB 3、SB 4は、SK 6とSK 3の中間に位置している。いずれも長方形の掘り方をもつピット群で、SB 1と同様に一列のピット列しか検出できなかったが、何らかの建物跡と思われる。主軸方向は、SB 3が $N-28^{\circ}-E$ で、SB 4は $N-3^{\circ}-W$ である。掘り方は、長方形を示し、深さは、SB 3は、15～25cm、SB 4は、25～40cmである。

覆土は、黒褐色土（多少砂質である）を呈している。遺物が出土していないため、時期については不明である。



第24図 SB 2 実測図



第25図 SB 3、SB 4 実測図

第3章 ま と め

今回の調査は、確認調査（磐田市教育委員会）によって、玉越遺跡A地区とされた地点である。表採や確認調査などでは、山茶碗なども発見されており、中世までの遺構も考えられたが今回は、中世の遺構は発見されなかった。

遺構としては、弥生時代の土壌が存在する。土壌の形態は、SK2、SK8のように長軸が長い長方形、SK3、SK7のように長軸が短い長方形、SK1、SK6のようにイチジク形のもの、SK5のように、長方形で一部が若干突出しているも、SK4のように隅丸三角形様を呈するものが確認された。SK5については、ピットとの切り合いも考えられたが、覆土の観察や、SK6のような形態も存在することから、イチジク形に類似した形態として考えられる。また、土橋遺跡⁽⁴⁾においては、本遺跡の長軸が短い長方形の土壌に類似した遺構から、多量の土器が出土している。

これらの土壌の性格については、墓墳とも考えられるが確実な証拠は得られていない。あるいは、遺物の廃棄場所としての遺構、何らかの貯蔵のための遺構などとも考えられるが明らかでない。

古墳時代の遺構としてSX1が存在している。SX1は、深さ25cm前後の浅い落ち込み状の遺構（池状遺構）で、調査区外へ範囲が及び、全容を明らかにできず、性格は不明である。

これらの他に、溝状遺構、掘立柱状建物などを検出したが、詳細な時期は不明である。

次に、遺物についてであるが、土壌から出土した弥生土器がある。これらの弥生土器は、いずれも弥生時代後期のものと考えられる。当地方の弥生時代後期の土器型式名としては、菊川式→白髪式とされていたが⁽²⁶⁾、その後、白髪式は古墳時代初頭の型式とされた。また、菊川式の⁽⁹⁾⁽²⁸⁾前段階として、二之宮式の位置づけもなされているものの、当遺跡出土の弥生土器はほぼ菊川式の段階に位置づけられる。（筆者は、後期前半を二之宮式、菊川式を後半におく立場をとり型式名については、あえて混乱をまねかないため従来の菊川式を使用した。）各土壌とも少量の資料ではあるものの型式的時間差が認められ、以下ややむりはあるがおおむね古い段階と新しい段階に分類し考察を進めていきたい。

SK3の壺形土器1（第10図）は、文様として縦に櫛描波状文を施しているが、壺の形態、色調、胎土などから考えて菊川式の範ちゅうとしたい。共伴遺物も菊川式と考えられる。SK5の壺形土器2（第13図）も文様は摩滅がひどく不明確であるが櫛描文が肩部から胴部にかけて施されたと思われ、形態も、肩がやや張り気味だが、頸部からなだらかに続いている。SK7からも壺形土器1（第18図）が出土している。この壺形土器も文様は櫛刺突の横線文のみであるが、形態はSK3、SK5出土の土器と同形態と思われる。

以上のごとく、SK3、5、7出土の土器は、縦区画の櫛描文をもつ点や刺突文その他の櫛描文の様相、断面三角形を呈する羽状刺突文の土器が顕著に見られない点などから菊川式の古い段階に属すると考えたい。

一方、SK1、2出土の土器は、破片がほとんどで不明な点もあるが、SK2では、14（第

8図)のように、結節羽状縄文を施す口縁部が存在する。また、SK1では16、17(第6図)SK2では、23(第8図)などのように、明確な断面三角形を張り付けて、櫛刺突羽状文を施した壺や、同様の4(第7図)の高坏などが出土している。これらは、菊川式の中でも、新しい段階に位置づけられると思う。また、SK2からは、20(第8図)のように複合口縁に棒状浮文を施した土器も存在している。この土器は、駿河地方の影響を受けながら当地方で成立したものと考えられるが、系統的には、前段階に遡る可能性がある⁽²¹⁾ 鶴松資料中。

さて、SK6出土の土器については、11(第16図)のように脚部が屈曲して、そこに突帯を施した土器がある。この高坏の類例は、天竜川以西の伊場遺跡、国鉄工場内遺跡等でみられる⁽¹⁶⁾ 鰐付の高坏が考えられる。しかし、SK6出土の高坏の脚は突帯があまり発達していない点、共伴の高坏の脚の形態が下開がりになっている点、同一個体と考えられる坏部の口縁が水平に外反するものの折り返し口縁を呈する点など異なる点も多い。どちらにしてもこの高坏の系統は、従来の菊川式の範ちゅうのものでなく、今後の資料の増加を注目したい。壺形土器は1(第16図)のように肩から胴が張った壺が存在している。文様は、口縁部から頸部にかけて篋状工具による羽状刺突文を施し、胴部にも櫛描の横線文を施している。その他に片口6(第16図)なども存在しており、菊川式の範ちゅうと考えられる。1(第16図)の壺形土器の形態の土器は、御殿・二之宮遺跡、NX1下層、OK171などで出土している⁽⁶⁾。その報告の中では菊川式の新しい段階として報告されているが、SK6資料中には、明確な断面三角形の突帯を有する壺形土器や高坏形土器が共範していないことや、11(第16図)の高坏などの関係から、時期決定には不明な点も残るが、一応菊川式の古い段階と考える指摘にとどめたい。

以上のように菊川式を細分してみたが、資料不足の観はぬぐえず、今後菊川式土器を多量に出土していると伝えられ、現在調査の進められている土橋遺跡、玉越遺跡(磐田市教育委員会調査分)の資料の分析により明らかにされるであろう。

古墳時代の遺物としては、SX1から土師器、須恵器が出土している。

須恵器としては、1～3(第21図)の坏身は立ち上がり内傾し高さも低く、遠考研編年ではⅢ期後半のものと考えられる。5の坏蓋も同時期と考えられる。また、4の坏蓋は、天井部と口縁部の境は、沈線として残っているなど、Ⅲ期中葉まで遡るとも考えられる。

土師器は、6(第21図)の坏は、いわゆる模倣坏身と呼ばれるものである。小破片であったが復元して図示した。1～3の須恵器と同時期と考えられる。7、8(第21図)は壺形土器の口縁部である。8は6などと同時期と考えられるが、7はく字状に開く口縁形態で、前段階の様相を示す。9(第21図)の高坏脚部も、中膨らみで裾が屈曲して開く形態で、いわゆる和泉期の特徴を示す。

参考・引用文献

1. 1982年 袋井市教育委員会 『鶴松遺跡』
2. 1983年 袋井市教育委員会 『掛の上遺跡Ⅱ』
3. 1982年 袋井市教育委員会 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査その2報告書 土橋遺跡 第1次調査』
4. 1983年 袋井市教育委員会 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査その3概報 土橋遺跡 第2次調査』
5. 1983年 袋井市役所 『袋井市史 通史編』
6. 1981年 磐田市教育委員会 『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ』
7. 1980年 磐田市教育委員会 『新豊院山遺跡（A-2・3地点）』
8. 1982年 磐田市教育委員会 『新豊院山墳墓群』
9. 1973年 磐田市教育委員会 『磐田市竹之内原古墳群調査記録報告』
10. 1968年 掛川市教育委員会 『掛川市天王山遺跡発掘調査報告書』
11. 1980年 清水市教育委員会 『飯田遺跡Ⅰ』
12. 1981年 清水市教育委員会 『飯田遺跡Ⅱ』
13. 1952年 清水市教育委員会 『飯田遺跡Ⅲ』
14. 1983年 清水市教育委員会 『飯田遺跡Ⅳ』
15. 1982年 静岡市教育委員会 『駿河・豊田遺跡』
16. 1982年 浜松市教育委員会 『伊場遺跡物編3』
17. 1982年 浜松市遺跡調査会 『椿野遺跡』
18. 1978年 浜松市教育委員会 『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅲ』
19. 1979年 浜松市教育委員会 『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅳ』
20. 1983年 浜松市遺跡調査会 『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報』
21. 1981年 浜松市遺跡調査会 『浜松市天王中野遺跡発掘調査報告書』
22. 1968年 静岡県教育委員会 『東名高速道関係 埋蔵文化財発掘調査報告書』
23. 1982年 袋井市教育委員会 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報 坂尻遺跡 第2次調査』
24. 1983年 袋井市教育委員会 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報 坂尻遺跡 第3次調査』
25. 1966年 遠江考古学研究会 『大沢、川尻古窯調査報告書』
26. 1956年 久永春男 「東海」『日本考古学講座』 河出書房
27. 1980年 佐藤由紀男 「弥生時代の集団関係」『静岡県考古学研究9』 静岡県考古学会
28. 1983年 鈴木敏則 「二之宮式土器について」『森町考古18』 森町考古学研究会
29. 1979年 静岡県考古学会 『静岡県考古学会シンポジウム2 須恵器古代陶質土器の編年』
30. 1983年 静岡県考古学会 『静岡県考古学会シンポジウム5 弥生時代の集団関係』

一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査その3報告書

—玉越遺跡—

1984年3月31日

編集 静岡県袋井市教育委員会©
袋井市国本3070の1

印刷所 株式会社 開明堂
浜松市中沢町1番1号

版 図



玉越遺跡遠景（磐田原台地より）



調査区全景



遺構全景



SK 1, SK 2 遺構



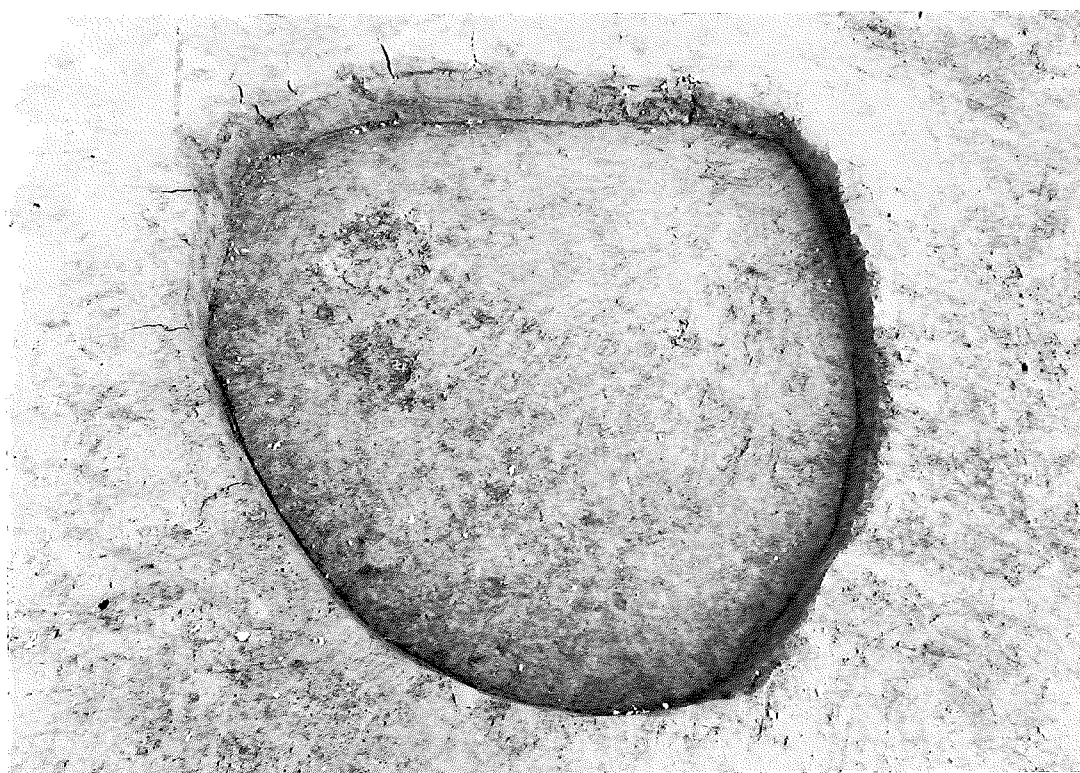
S K 1 遺構



S K 2 遺構



S K 3 遺構



S K 4 遺構



S K 5 遺物出土状態



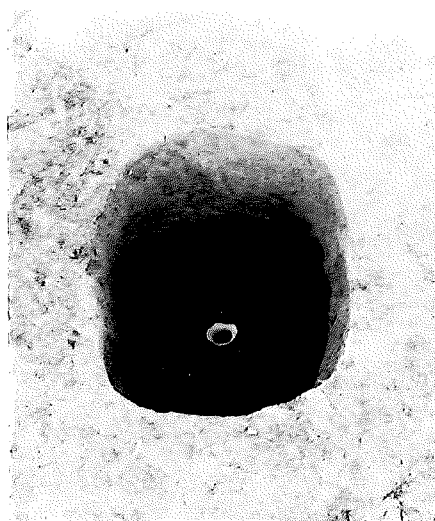
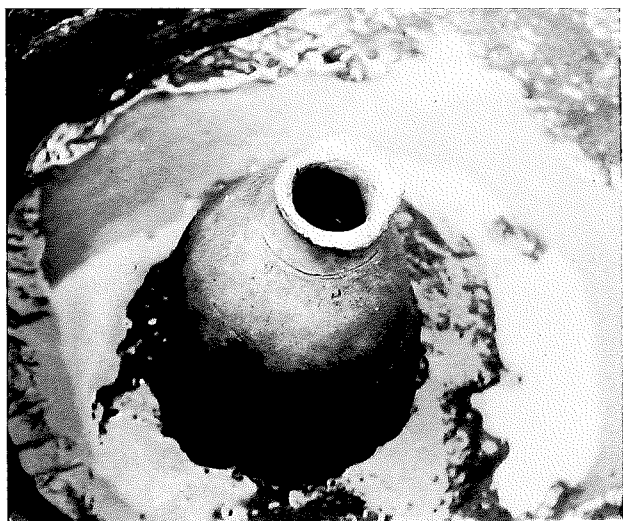
S K 5 遺構



S K 6 遺物出土状態



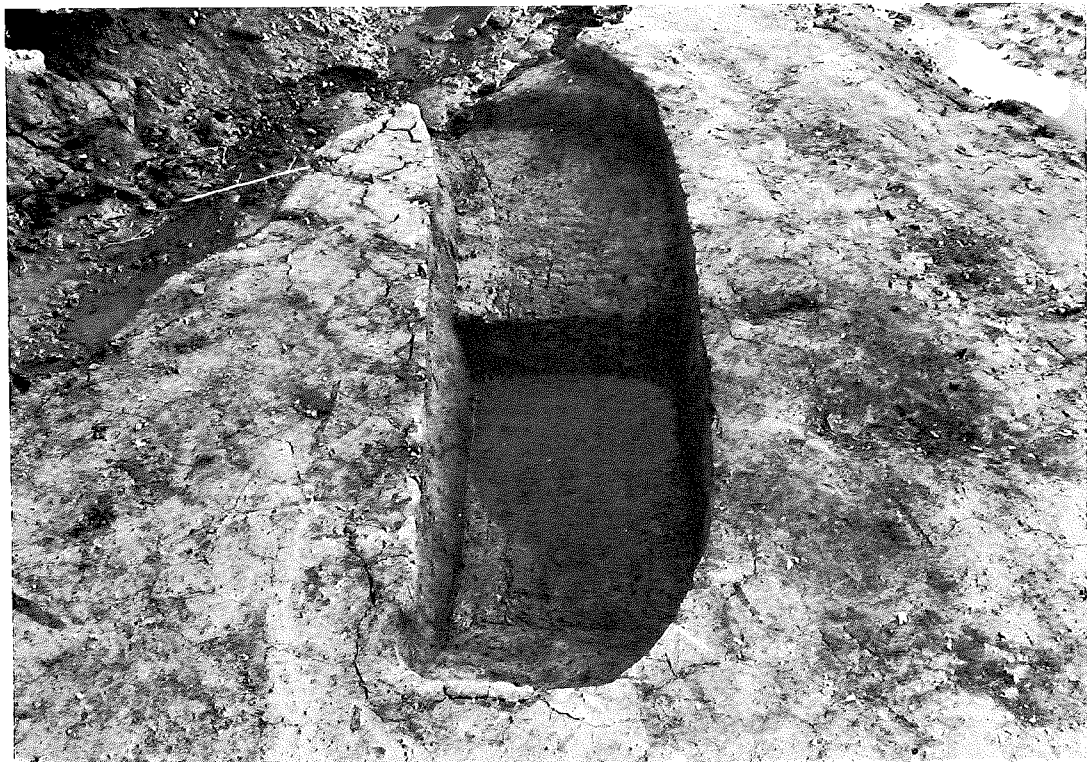
S K 6 遺構



S K 7 出土遺物出土状態



S K 7 遺構



S K 8 遺構



S X 1 遺構



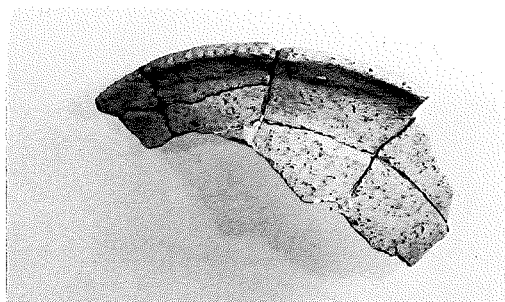
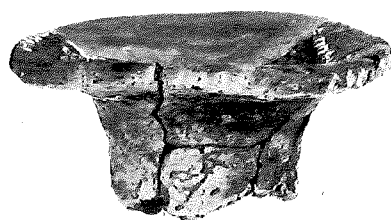
SB 1 遺構



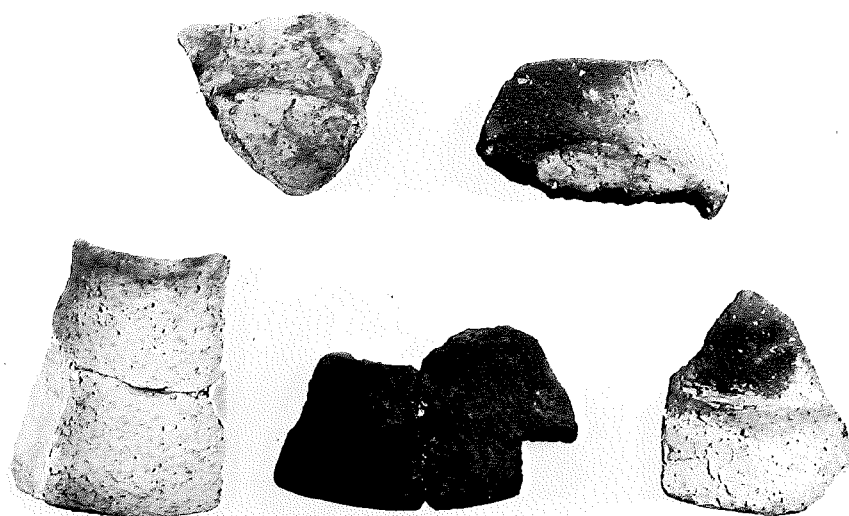
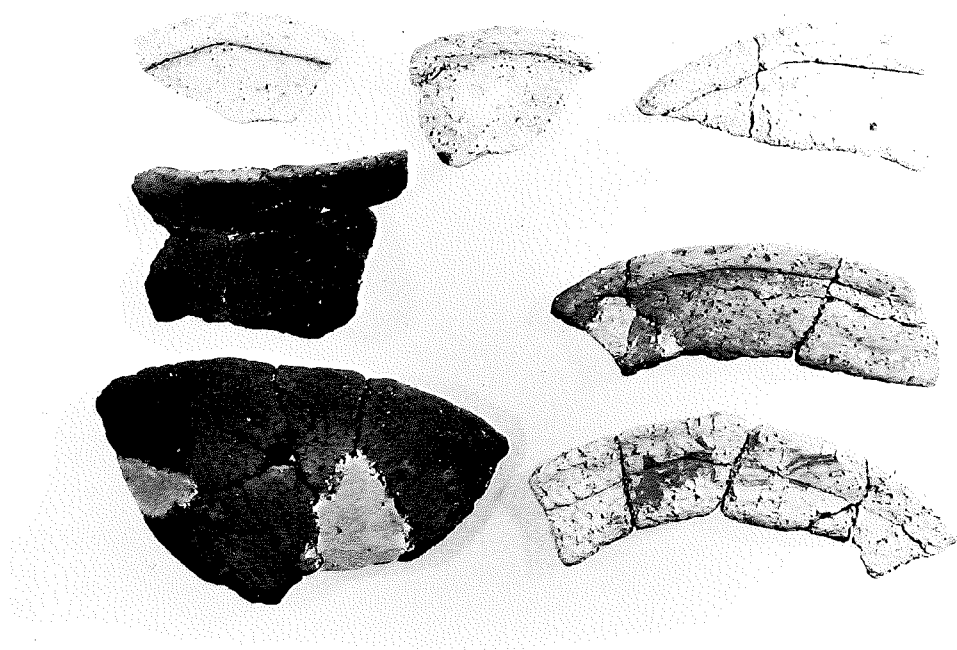
SB 3, SB 4 遺構



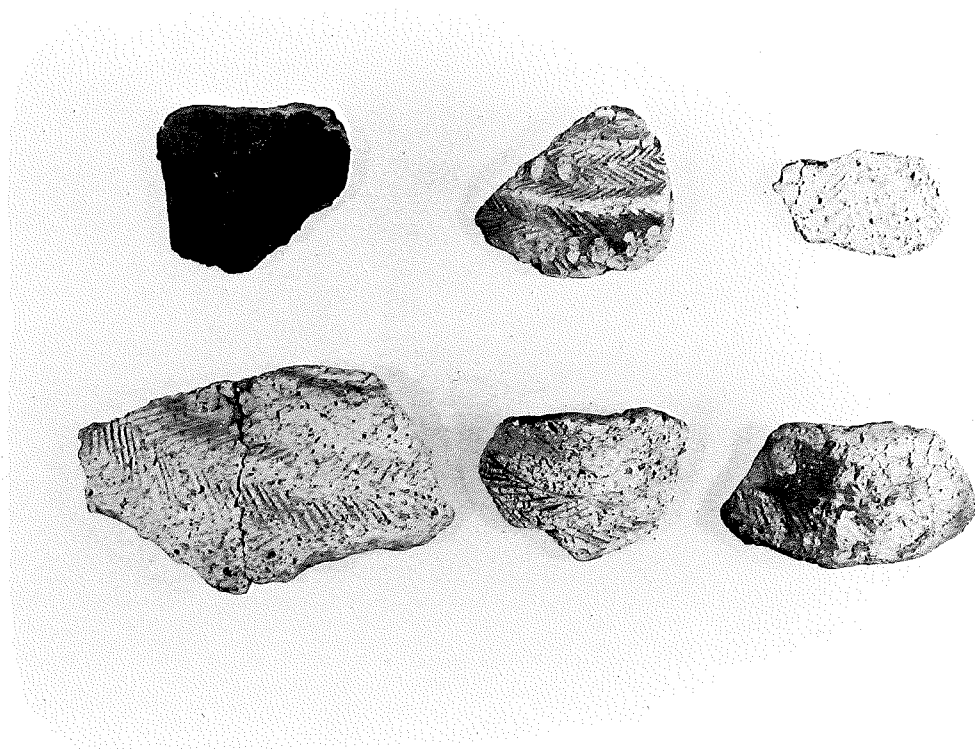
SD 1, SD 2 遺構



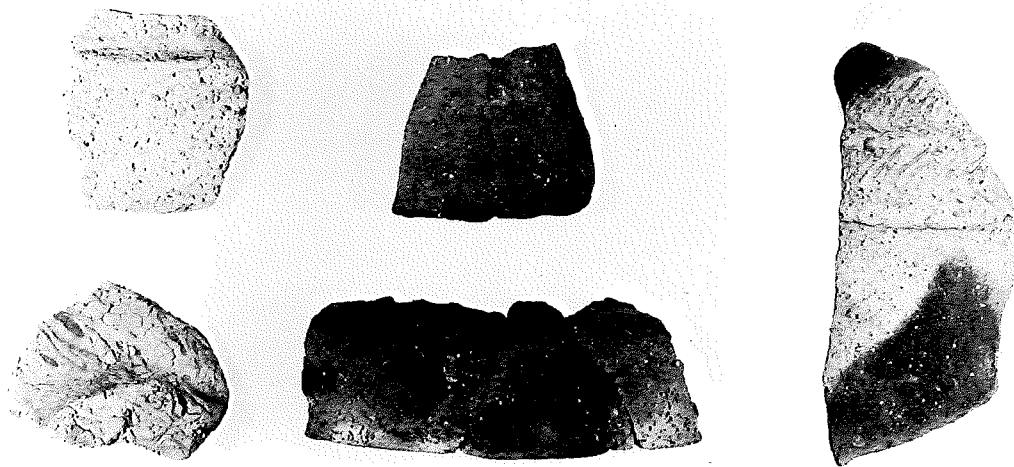
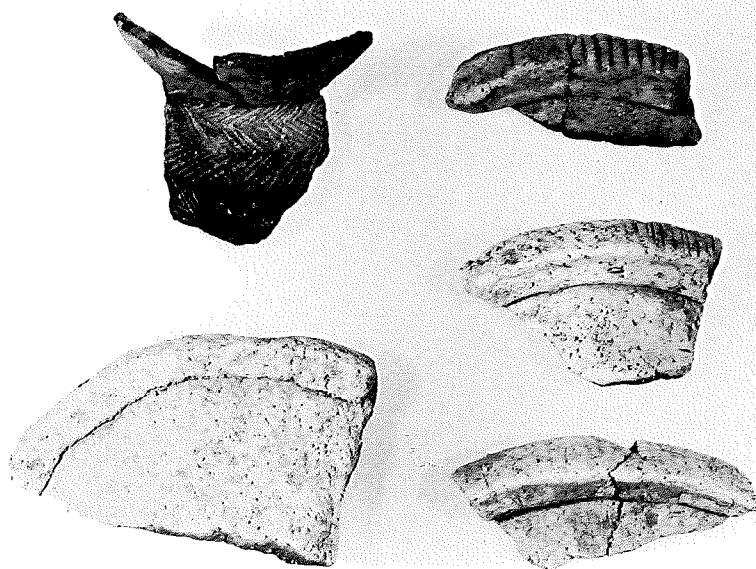
SK 1 出土遺物



SK 1 出土遺物



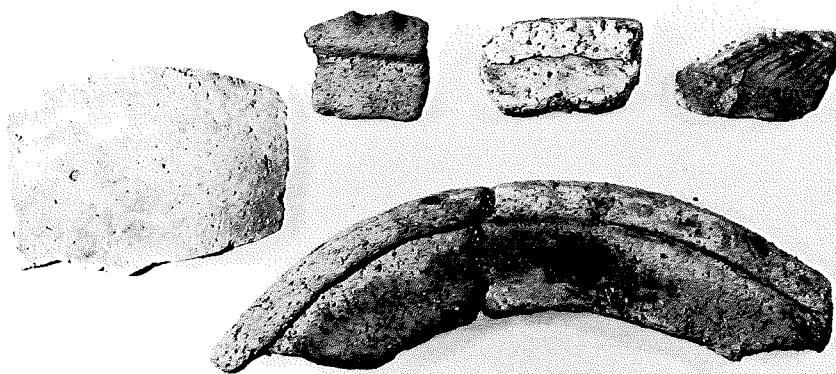
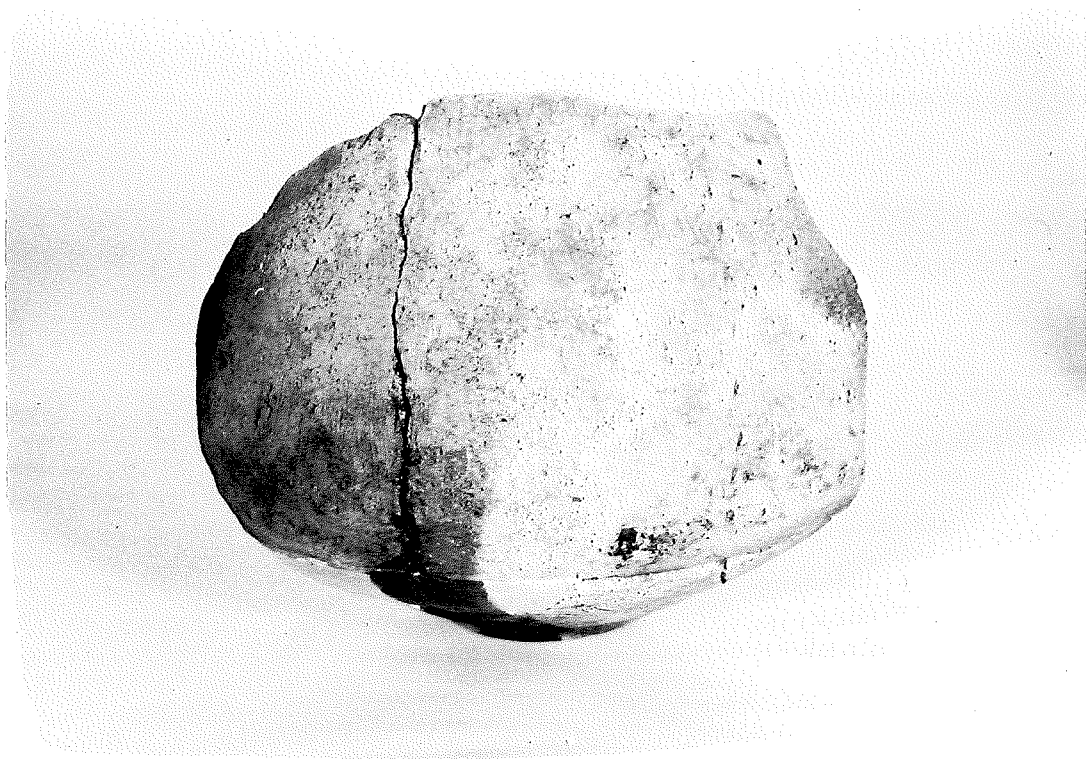
S K 1 出土遺物



S K 2 出土遺物



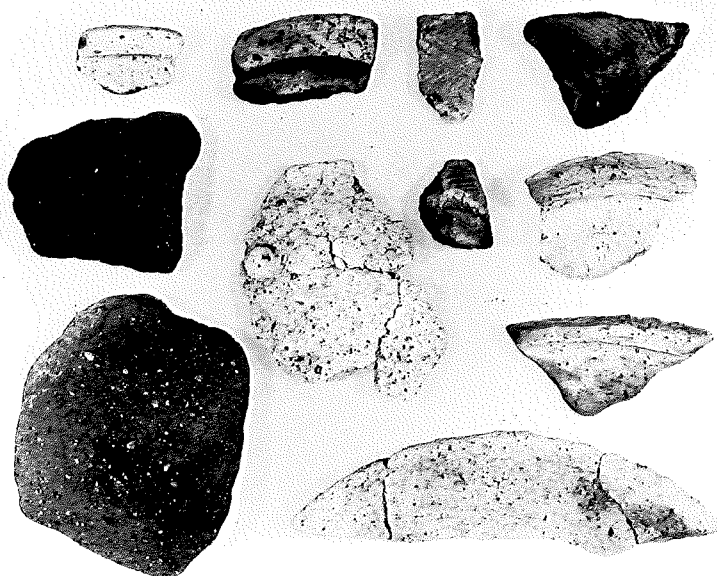
S K 2 出土遺物



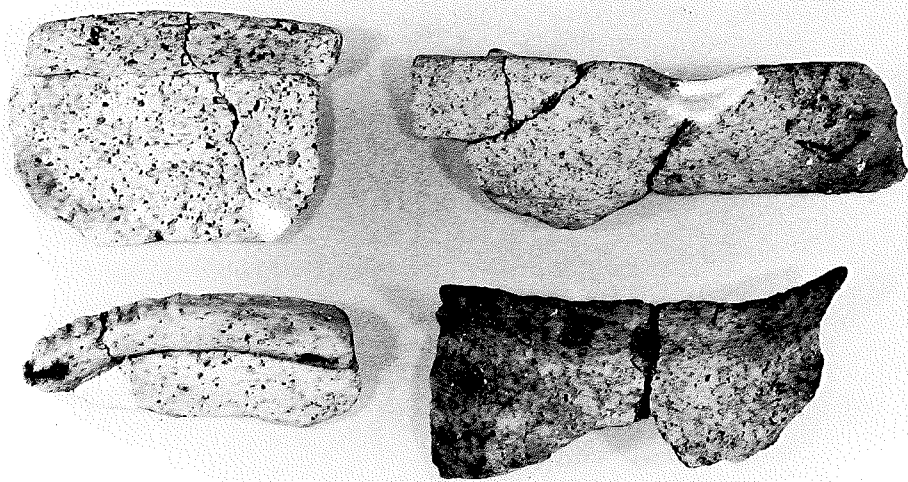
S K 3 出土遺物



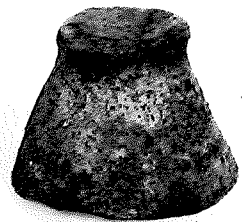
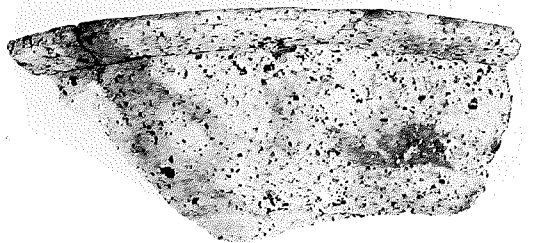
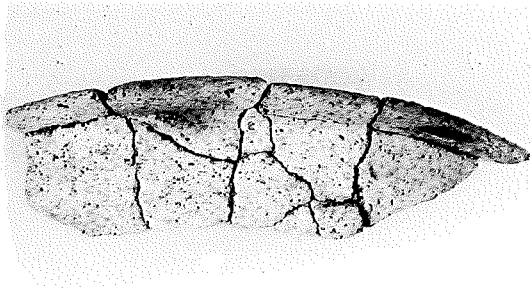
S K 3 出土遺物



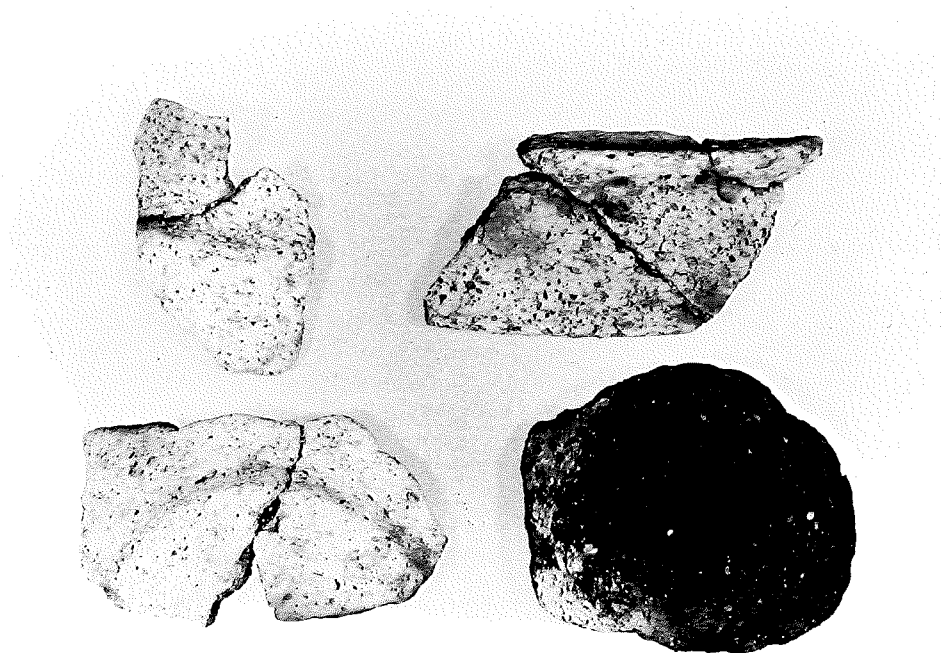
S K 5 出土遺物



S K 6 出土遺物



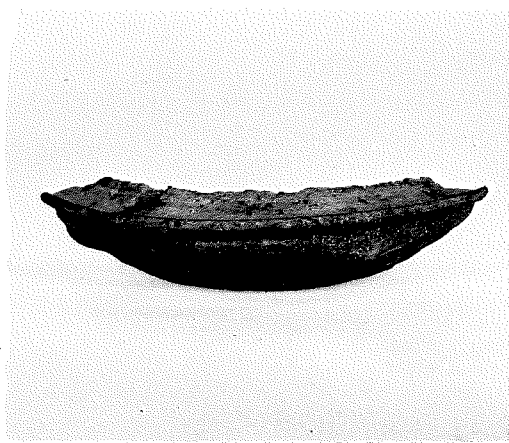
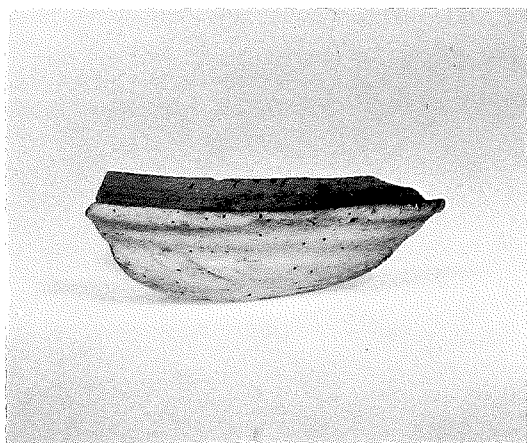
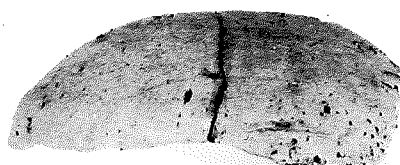
S K 6 出土遺物



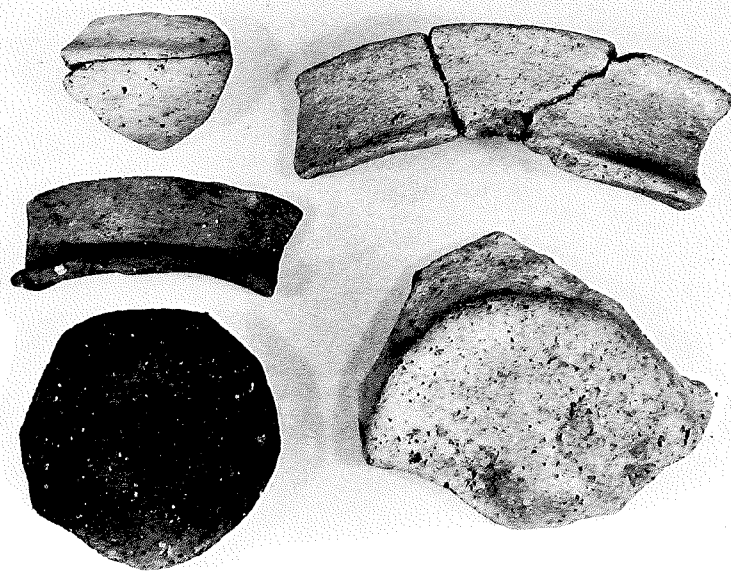
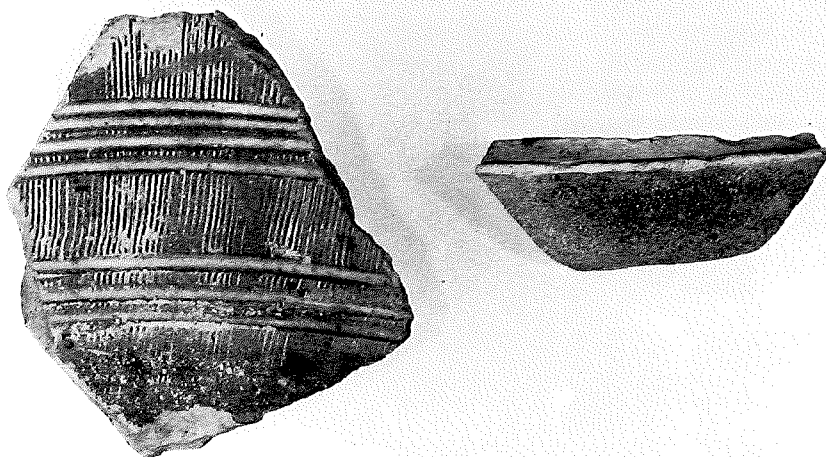
S K 6 出土遺物



S K 7 出土遺物



S X 1 出土遺物



S X 1 出土遺物



S X 1 出土遺物